『浄土和讃講義』の翻刻

普賢保之
粟村亜矢
雁金亜季子
高橋佳世

木版刷りのテキストを翻刻して研究資料として供する。香月院深励の著述は『真宗大系』等にも所収されているが、『浄土和讃講義』はまだ木版刷りのままで翻刻されたものはない。

今回の翻刻は大学院の「仏教文化史特論」の中で、『浄土和讃』研究のための一助として三人の院生と共に、香月院深励の『浄土和讃講義』を翻刻したものである。

和讃の解説書は少なくないが、香月院深励（一七四九～一八一七）は、真宗大谷派の勝れた学僧であり、本書の中で多くの経論釈を引き言葉の説明や言葉の拠り所を示しながら緻密な解説を施している。その解説書が未だ木版刷りのままで、限られた者しか読めない状況にあるのは好ましいことではない。木版刷りのままのものを翻刻することは、今回の研究だけでなく、今後の研究にも大きく貢献することになり、その意義は大きいと考えている。

浄土和讃講義巻二

第十一會

1

智慧の光明はかりなし　　有量の諸相ことごとく
光暁かぶらぬものはなし　　眞實明に帰命せよ

「智慧の光明はかりなし」等。二に光明の徳相十二。初に无量光。上の和讃は總じて報身の果体を讃嘆し、これより下は別して光明の徳相を讃嘆なさる。其光明の相たを『大經』の十二光佛に約して十二首の和讃を製して讃じ玉ふ。其中最初に无量光の徳を示し玉ふなり。「智慧の光明はかりなし」とは、『方等大集經』一初左「智慧光明能破黑闇」と有り。是等の言を取りて「智慧の光明」との玉ふ。

2

昨日弁ずる如く上の和讃の「世の盲冥をてらす」とのたまふ言も『方等大集経』に「世の盲冥」と云ことがあるなり。ヶ様に『大集経』『華厳経』などの言を取せらるゝも夫に御依りなされたと云ではなひ。曇鸞大師などは諸経論を腸にして居玉ふゆへ筆を取て御書なさるゝとき自ら諸経論の言が出るなり。別して此『大集経』は曇鸞大師最初に註を造り玉ふと云事傳記の中に文言半を過ぐとあるゆへ半分過る程も註を書玉ふたとみへる。爾れば別して『大集経』の言が出る筈。ときに「智慧の光明」と仰せられたは『六要鈔』の御指南の如く涅槃の三徳の中の般若の徳を出し玉ふ。

3

嘉祥の『大乗玄論』四右二「或但名為レ慧。如二釋論云一。波若秦言レ慧。或俱翻二智慧一」とある。此釋論と申したは『大論』の事。『大論』十八四十右般若波羅蜜を釋するに「般若を慧と翻ずる」と申してある。此は十波羅密のときは第十に智慧波羅密と云うが別にあるゆへ第六の般若は慧なり。そこで但般若を慧と翻ず。其外の諸経には多く智慧と翻ず。天台の『法界次第』一丁九「般若を秦に言二智慧一」と釋してあり。爾れば此に智慧とは梵語では般若のこと。上の和讃に「法身の光輪」と云。下の和讃では「解脱の光輪」とあるから此「智慧の光明」は般若の徳なること分明なり。

4

爾るに古来より『六要』の釈を用ぬと云は甚だ心得難し。『嘗解』（月筌）に上の「法身の光輪」の下で「弥陀成仏」の和讃は総じて弥陀の果体を讃ず。「智慧の光明」の和讃から下は光明の別徳を讃ずる。爾れば総じて果体を讃ずる下へ唯法身の一徳をあげ玉ふはづはなひ。夫れゆへ『六要鈔』の釈は不可なり、と云て破してある。いかさま総別の科段の別れる処の文ゆへ三徳を三首の和讃へ跨げて出し玉ふ筈はないとの不審はあれども、上の和讃は総じて果体を讃じ、下は別して光明の徳を讃ず。されども上の和讃に讃嘆するところの光明も下に讃ずる光明も弥陀の光明の体に二つはなひ。そこで文の科節は分れてあれど、義は連環して続くことを顕す為に、三徳をば次での如く三首へ述させらるれども義の離れぬように続かせられたものなり。これが文の科節、義の連環と云ふものなり。

5

扨て其上ノ和讃に法身の徳を出し玉ふは如何と云に法身の徳は微妙清淨の佛身のこと。爾れば佛身は即ち佛体ぢやゆへ報身の果体を讃ずる處へ法身の徳を出し玉ひたもの。亦この和讃は別して光明の徳を讃ずる最初なり。すべて光明は智慧の相なるゆへ、諸有の光明皆智慧から顕はるゝと云ことを顕す爲に、爰に般若の徳を出し玉ふとみへる。とき光明は智慧の相と云こと『大論』七左廿に「仏欲レ現二智慧光明神相一」等。『浄土論』では彌陀の光明のことを光明智相とのたまふ。夫れ『論註』の釋に「光明は智慧の相なり」との玉ふ。爾れば智慧は体なり。光明は相なり。諸有の光明みな般若の智慧から顕れると云ことを「智慧の光明」との玉ふ。これをば祖釋の上で申せば『唯信文意』に「阿弥陀佛は光明なり、光明は智慧のかたちなりと知べし」と。これ光明は智慧のすがたぢやと云ことなり。

6

亦『唯信文意』に「一切諸佛の智慧をあつめ玉へる御かたちなり。光明は智慧なり、と知るべし」とあり。これは密経では弥陀を自受用智慧身と名て阿弥陀仏如来は諸佛の智慧を主にさとらせられた佛ぢゃと申すなり。浄土の正依の『大経』では智慧段に至って弥陀の五智を説いて「諸佛無上智慧」と説いてある。爾れば阿弥陀如来は一切諸佛の智慧を集め玉へる無上の智慧、其の無上の智慧から放ち玉ふ光明ゆへに諸佛中の王なり、光明中の極尊なり。この義を顕はさん為に、今弥陀の光明の別徳を讃嘆する最初に「智慧の光明」との玉ふなり。

7

「はかりなし」とは、この言が正く無量光の徳をのべ玉ふ。ときに『大経』の十二光、浄影・憬興等の釈がある。吾祖の「真仏土巻」に憬興の釈を引玉ふゆへ、憬興の釈に依て伺ふべきこと。此無量光と云を『述文讃』中四十四右「仏光非二算数一故無量ナリ」と。是は無量と云を数に約して釈するので、弥陀の光明は六百万の光明があるの、或は八百万の光明があると云やうに数を以て量ることはならぬ。無量無数の光明ぢゃ故に無量光と云なり。亦『顕名抄』十八右「第一に無量光といふは利益の長遠なることをあらはす。過・現・未来にわたりてその限量なし。かずとしてさらにひとしきかずなきがゆへなり」と。如レ是に釈ある中、初に三世に約して釈なされ、弥陀の光明は過去・未来・現在の三世に渡ていつまでも其利益に数限りなきゆへ、無量光と云釈なり。后の釈は憬興の釈に同じこと。この初の釈、所依のある釈で『大論』七十四廿五右「（経云）無数者名レ不レ墮二数中一。（乃至）無量者不レ可レ量。若過去若未来若現在」と。如レ是無数と無量との差別を説てあり。爾れば『顕名抄』の釈用ひねばならぬゆへ、蓮師『正信偈大意』の釈もこの『抄』の通りなり。爾るに今家に於ては二釈ながら用ひること丶と心得るがよひ。ときに御草稿の御左訓に［チハアレハアレコレハコレトフンヘチシテオモヒハカラフニヨリテシユイニナツクエハコノオモヒノサタマリテトモカクモハタラカヌニヨリテフトウニナツクフトフサンマイナリ］是羽州本・高田本この通りなり。不動に名と云。河州本にはこの七字なし。仏光寺本も河州本と同じ御左訓なり。

8

ときに此御左註別に所依ありそふな御釈、台密の釈にでも、御依りなされたかとも思はる丶處、この所依がしれぬゆへ外へもあれこれと尋遣はしたれども、是にしっかりと合た本拠は未だなし。爾し義はよく聞へてある。「チ

ハアレハアレ」等とは、智慧の二字を分て御釈なされた浄影、嘉祥、賢首等の智慧の釋がみな意はこれと同じこと。嘉祥の『大乘玄論』四二紙「照レ空爲レ慧鑒ルヲ有爲レ智故此経云知二一相門一起二於慧業一知三種種相門一起二於智業一」文。「経曰」とは『維摩経』の取意の文。又『大乘義章』九五十「知二世諦一者名レ之爲レ智照二第一義一説以爲レ慧。」是嘉祥と意は同じことなり。是を今御左訓へ引合て弁ずるに、「鑒レ有爲レ智」とは俗体万差の諸法の歴然と分れてあるをあきらめ知るが智の字のこゝろ。あれは色法なりこれは心法なり、あれは松なりこれは竹なりと世俗体の諸法の分れてある處を思惟分別して知るが智の字。そこで今智は「アレハアレコレハコレトフンベチシテ」等とあり。また「照レ空為レ慧」とは今迄思惟分別してみた差別の諸法を、其体空也と観じて第一義諦の實相の理に体達するゆへに言亡慮絶して思惟分別のなくなる所が慧の字の意。そこで今御左註に「コノオモヒノ乃至フドウニナヅク」との玉ふ。

9

不動とは、動ぜぬ事諸法の従本来常自寂滅相と本来寂静の理に体達して思惟分別して、波の動かぬ所ゆへに不動と名るなり。不動三昧の事『止観輔行』一の一十三「天魔降ジ已テ得二不動三昧ヲ一」文是は佛の天魔を降伏なさる降魔の定ぢゃ。そこで不動三昧は天魔の為に驚動せられぬ義。天魔がどのやうにしても佛が動され玉はぬ三昧ゆへ、不動三昧と云。それならこゝへ合ぬ。又『六十華厳』三十七三右「如来示現般涅槃時先ヅ入二不動三昧一」とこれ佛の涅槃寂滅無為なる所で不動と云ゆへ、これ又爰へは合ひ難ひ。又『大論』四十七「有リテレ人言知ルニ諸法實相畢竟空ナリト一智慧ト相應スル三昧ナルガ故二不動之文」是百八三昧の中の不動三昧を釋するに四釋あり。今其第四釋なり。これが爰へ合なり。一切諸法は畢竟空なり。と照し諸法實相の理に体達し、境智冥合して思惟分別の動ぜざる所で不動三昧なり。そこでこれ第一義諦をしる慧の字を不動三昧なりとのた玉ふた。爾れば御左訓の詮ずる所は、世俗諦の諸法を一ツ々々

諦らめ知るが智なり。真如實相の理に体達するが慧にして即ち佛の權智實智なり。今佛の般若の徳に諸有る權智も實智も収る故、如」是智慧の二字をわけての御釈とみへるなり。

10

「有量の諸相ことごとく」御草稿左訓と今家の本の御左註とに御指南あり。まづ御草本の御左訓に［ウリヤウハセケンニアルコトハミナハカリアルニヨリテウリヤウトイフブチホウハキハホトリナキニヨリテムリヤウトイフ］御左訓は国字ゆへ、結句よみそこなふことがある。昔も「一丈ばかりの悪鬼となりて」とかいたを「一舛ばかりのあづきとなりて」とよみとれり。ときに今「世間ニアル」等とは、是は仏を除ひて諸有る一切世間の事じゃによて、有情世間と器世間とへ通ずる。「世間ニアルコトハ皆量リアル」とは先有情世間で申すときは三界の諸有る有情は皆からだに大小があり、命ちに長短がありて、みな量り限りがある。又山河大地等と器世間の諸法は勿論ほとり限りがある。次に「ブチホウハ」とあるは、有情世間と器世間とへ対して仏法との玉ふゆへ、仏所得の法なり。所得の法とは仏の具へ玉ふ内証外用の功徳なり。其徳はみな因位永劫の修行によて報ひ顕はるゝゆへ、一々の徳がみな無量無辺で際は辺りはなひ。此御釈によるときは、仏を除ひて其外の一切世間の法はみな限りがあるゆへ、そこを「有量の諸相」と云。「諸相」の相は相状の義で、色心の諸法みな夫々差別のすがたがあるゆへ、「諸相」と云。

11

是御草本の意なり、又今家の左註に「ヨロツノシユシヤウ」とある。是では有情世間計りに限る。如」是両方の御左訓の違はどふぞと云に、これはみな「有量の諸相」と云言が上の句へ望めると下の句へ望めるとで、義が違ふ

ことを顕す御指南とみへる。まづ第一句の「智慧の光明はかりなし」の句へ望めるときは二種世間へ通ずる。それはなぜと云に一切世間法は限りありて有量と申す。佛境界は无量无辺ゆへ「智慧の光明はかりなし」と云。是れ世間の有量をあげて佛の无量光を顕すのぢやゆへ有情と器世間へ通ずる。又次句へ望めるときは「有量の諸相」と云はよろづの衆生の事なり。十方の衆生一人でも「光暁かぶらぬものはなひ」とあらはす言なり。次の句の「ものはなし」と「もの」とさしたは人をさす言ぢやよて次の句へ望めるときは、この「有量の諸相」と云ふはよろづの衆生の事なり。吾祖『讃弥陀偈』の文をヶ様に御覧あそばしたものぢや。かふ解さねば、『讃弥陀偈』の文がすまぬなり。此釋の趣きを二本の御左訓に顕はさせられたとみへるなり。

12

「光暁かぶらぬものはなし」とは、「光暁」と云は暁の字『玉篇』に『説文』を引て「明也曙也」とありて、夜のあけがたの事なり。弥陀の光明を夜のあけがたにたとへて「光暁」との玉ふ。これは第一句の「智慧の光明」と云から出て来た言なり。上に引く『大集経』の文にも「智慧光明能破黒闇」とある。佛の智慧の光りを以て衆生の無明の黒闇を除かせられ、その黒闇を除ひたところは夜のあけがたなり。いまゝで真のくらやみでありたのが、夜のあけがたになりたので、くらやみがなくなる如く智慧の光明で黒闇をのぞくは夜の暁がたの如く故に「光暁」との玉ふ。十方衆生一人としてその光明の利益をかふむらぬものはなひと云事で「光暁かぶらぬものはなし」との玉ふなり。「かぶらぬ」とはかふむらぬと云事、又「光暁」と云言に弥陀の光明は衆生をして無上浄信の暁きに至らしむる利益ありと云事を含であるなり。存覚上人の『浄土見聞集』に「光明は智慧なり。この光明智相より信心を開発したまふゆへ信心は佛智なり」とある。これ弥陀の光明は智慧の光明ぢゃによりてそこで衆生の信心の智慧

を開発なされる。爾れば弥陀の光明をば夜のあけがたにたとへる光暁の徳があるなり。

13

次に「真実明に帰命せよ」とは、この明の字に上声の圏発あるなり。今それが落ちてあり。「真実明」とは、これより下の三十七名、これは別に経論の中にこの通りに仏名をあげてある拠はなし。これは考ふるに『方等大集経』などに、四天王・帝釈天等の諸天が、仏のみもとへ詣しておのおの偈頌をつくりて仏を讃嘆なされるが、その偈頌の中に銘々意楽に任せて、或は光明の徳を讃嘆する偈文もあり、或は大悲の徳を讃嘆する偈文もあり。其自ら讃嘆したる徳をとり直に仏名を立て、或は無上尊に帰依するの、或は無余等を敬礼するのと云やうに、仏名が立てゝあり。いま鸞師の三十七名もそれらの例にならはせられたとみへるなり。それゆへにこれは別に拠をもとめるのではなひ。一段一段の偈文に讃嘆するところの徳を取て直に弥陀の仏名を立て、「真実明に帰命せよ」「平等覚に帰命せよ」との玉ふなり。今「真実明」とは、『方等大集経』一（十六右）に「破シ無明闇ヲ為諸ノ衆生作智慧明」とある。今この「真実明」の明と云は、その智慧明のことぢゃ。これ上の第一句に「智慧の光明」と云ひ、第三句に「光暁」と云たは、弥陀の光明は無明の黒闇をのぞき玉ふ智慧明の徳ぢゃによりて、その智慧明の徳をすぐに取て仏名を立てゝ「真実明」と御名づけなされたものなり。真実と簡んだは、虚偽に対する言で、有漏業所感の虚偽顛倒の明でなひ。無漏清浄業よりおこる「真実明」との玉ふ。

14

御草稿の御左訓に「シントイフハイツハリヘツラワヌヲシントイフシチトイフハカナラスモノノミトナルヲイフ

ナリ」とある。この御釋は、真は偽に対する言ぢゃによりて、いつはりへつらわぬことぢゃ、実は偽に対する言ぢゃによりてからではなひ、みのなることをいふなりと御釋なされたのなり。「帰命せよ」とは、これは本偈の文には稽首とあり。稽首と帰命とをわけるときは、稽首は首を地に至らしむることで身業の礼讃なり。又帰命と云は、おもに意業に帰することを帰命と云なり。されども不空三蔵の『仁王陀羅尼釋』四右十には「梵語の娜謨ト者帰命の義、亦云二稽首一ト、亦云二頂礼一ド」とある。このときには稽首がすなはち帰命なり。そこで今も本偈には稽首とあれども和讃では帰命と仰せられた。又本偈の文では鸞師自ら稽首帰命なされる事ぢゃ。爾るに今は化他をおもになされて帰命せよと云下知の言をおかせられたのなり。ときにこゝを『嘗解』の中には、この帰命と云は「行巻」や『尊号銘文』に釋してある一念帰命とは違ふぞと申してあるが、成程本偈の文からみれば、身業礼の帰命ぢゃによりて信后相續の礼拝の事で一念帰命の信心のことではなひなり。さりながら今吾祖の和讃では一首々々の御文に帰命せよ々々と人をすゝむる言になされたからみれば、たゝ信后相續の礼拝をすゝめたるばかりにはあらず。不信心のともがらはやく弥陀に帰命し信心得よと御勧めなさるゝ御意で、帰命せよと仰せられたとみへるなり。

15

解脱の光輪きはもなし　　光触かふるものはみな
有無をはなるとのべたまふ　平等覚に帰命せよ

二に無辺光。此の一首は無辺光の徳を讃嘆なされるなり。十二光に科段を分てみれば六段が分れると申すこと先達て「正信偈」講説の時分に弁した事にしてこの最初の無量・無辺・無碍の三光これが一科にして光明無量の体徳をあげたものなり。第十二の本願の光明無量の願成就の果体にそなはる徳がこの三光なり。『阿弥陀経』に「彼佛

光明無量照十方国無所障碍是故号為阿弥陀」とある。この「光明無量」とあるのが無量光の徳なり。「照十方国」とあるが無辺光の徳なり。「無所障碍」とあるが無碍光の徳なり。次句に「是故号為阿弥陀」とあれば弥陀の真報身の果体の徳と云がこの三光なり。天親菩薩の「盡十方無碍光如来」と云名号を御立なされたも此の三光の徳によりて立させられたと申すこと先達て弁した通りなり。今は其中の無辺光の徳なり。

16

さて最初の句に「解脱の光輪」とあるは、『六要鈔』の御指南の如く、涅槃の三徳の中の解脱の徳をあげさせられたり。その解脱の徳から御放ちなさるる光明ぢゃと云事で、「解脱の光輪」と仰せられたり。この解脱の徳と申すは菩提涅槃の二果の中では涅槃の断徳なり。そこで解脱と云は繋縛をはなれることで、あらゆる業煩悩をことごとく断じつくして、業煩悩の繋縛をはなれた所が解脱の徳なり。この涅槃の断徳に付て、小乗の涅槃と大乗の涅槃とのちがひがあり。小乗の涅槃は、ただあらゆる業煩悩の繋縛のなくなりた所を断徳と云なり。大乗の解脱は爾らず。大乗では大涅槃の体は本来清浄にして、因にありても果にありてもかわらぬを涅槃と云なり。それが果上に至りて業煩悩をはなれた所を解脱の徳と云なり。それゆへに『大乗義章』十八廿六左云「言解脱者自体無累名為解脱又免羈縛亦曰解脱」文と。初めの義では涅槃の体がもとより清浄にしてもろもろのわづらひをはなれたる所を解脱と云。后の義では果上へ至りてあらゆる業煩悩繋縛をはなれたる所を解脱と云と、この二釈があるなり。これが小乗の涅槃なれば初の義は設けることはならぬなり。大乗の涅槃ぢゃによりて、この二釈を以て釈したものなり。

17

さて「光輪」とは、御草稿の御左訓「輪」の字の左りに「クタク」とあり。これは昨日弁ずる通りに、輪の字にはくだく・やぶると云摧破の義があるによりて、弥陀の光明を以て衆生の悪業煩悩をくだきやぶり玉ふと云ことで、光輪と云のなり。さて御草稿の御左訓の次の文に、［ゲダチトイフハサトリヲヒラキホトケニナルヲイフワレラカアクゴフボンナウヲアミタノオムヒカリニテクタクトイフココロナリ］とある。これは羽州本髙田の本、この通りなり。これは「解脱の光輪」の四字の釋なり。「ゲダチトイフハサトリヲヒラキホトケニナルヲイフ」と云が、先初めに解脱の二字の釋なり。それから「アクコフホムナフヲアミタノオムヒカリニテクダクトイフコヽロナリ」と云は、光輪の二字の釋なり。ときに『嘗解』の中にこの御左訓を引てこの御釋からみれば、衆生の悪業煩悩をくだきやぶるを解脱と云。爾ればこゝの解脱と云は、これは三徳の中の解脱ではなひ。それを『六要抄』では、三徳の中の解脱の徳に配當なされたは祖師の御言ではなひと云て、破してあり。今謂三徳の中の解脱の徳には、衆生の悪業煩悩をくだき破ると云化他の利益はなひと思はるゝのは、嘗解者の如きは果上へ至りて業煩悩を離れた所斗りを解脱と云と思ふて居らるゝは謬なり。小乗の解脱は、たゝ果上へ至りて佛自ら業煩悩をなふしてしまひなされたすがたが解脱なり。今大乗の解脱はそふではなひ。解脱は衆生の利益に約して釋するのが大乗の正義なり。

18

『唯識論』などには煩悩障を断じて解脱をさとり所知障を断じて菩提をうると云。これらが小乗と相似である。法相で、こゝらが賢首の所謂始教大乗のすがたにしてたゝ煩悩を断じたばかりが解脱ぢやと云ては、一乗の解脱も一つことになるなり。實大乗の所談は爾らず。『涅槃経』五七左に「佛の大涅槃を解脱と名くるは佛衆生を済度し玉

ふにいかなる所へ至りても障りと云はなひ。地獄へ入て衆生を済度しても地獄の　ふに焼るゝと云わづらひなく、餓鬼道に入て衆生を済度しても餓鬼の苦みを受ることもなく、一切の所に於てもろ々々のさはりをはなれて思ひのまゝ衆生済度するを解脱の徳」と云。これは『涅槃経』の文を章安の『疏』のこゝろで解すればこの通りなり。實大乗の解脱と云ものは、小乗と大きなちがひにして解脱と云はものゝさはりのなひ事ぢや。衆生済度にさはりなひのが解脱の徳なり。この事は天台の『別行玄義四明の記』では四　　に釈して小乗の断徳は、滅無の断と名く。たゝ煩悩の薪の滅したところが小乗の涅槃なり。大乗の断徳はそふではなひ。衆生済度に於て任運自在にして悪として染ます事あたはぬが、これが大乗の解脱ぢやと又もとよりそれでなければこの文がすまぬなり。解脱の徳と云は自ら佛が業煩悩を断じて御坐なされるばかりではない。衆生の悪業煩悩までをくだきやぶりたまふが解脱の徳ぢやによりて、「解脱の光輪」と仰せられたは大乗の解脱のこゝろで仰せられたものなり。爾ればいよ々々『六要鈔』の御指南の通りに三徳の中の解脱なりとおしきはめるが宜きなり。嘗解者などは深く考へずして先徳の御釈をば破ると云はよろしからぬことなり。

19

第十二会

「解脱の光輪」等。さて「きはもなし」とは、この「きはもなし」と云言が正く無辺光の徳を顕す言で、弥陀の光明十方世界をてらしてきはほとりのなひ光明ぢゃによりて、無辺光と名るなり。「きはゝなし」と云はずに、亦復「きはもなし」と「も」の手仁葉を御つかひなされたことは、上で弁じた通りなり。今こゝも「も」の手仁葉で、十方世界をてらすと云ことをあらはしたものなり。弥陀の光明は十方世界へみちみちて照したまふなり。爾らばき

はほとりがあるかと云へば、きはほとりもなひと云ことで「解脱の光輪きはもなし」と仰せられたり。無辺の名を釈すること『述文讃』中四十四「無二縁ト為シ不ル事一レ照故無辺ナリ」とある。憬興の釈は上の無量光を数に約して釈する。この無辺光は所被の機縁に約して釈なされるなり。弥陀の光明の所被の機は、一切衆生一人としてもれるものはなひによりて、無辺光と名ける。この釈の意は無辺の辺の字は辺畔の義にて一方へかたよる事なり。親きものぢゃによりてててらすの、疎きものぢゃによりてててらさぬと、云やうな事があらうなれば、それはかたよると云もので、辺畔があると云ものなり。今弥陀の光明はさうではなひ。怨・親・中の三つをはなれて、かたよらずだれでもてらし玉ふ光明ぢゃによりて、無辺光と名ける。これが憬興の釈のこゝろなり。

20

又、存覚上人の『顕名鈔』には二釋ありて、初めの釋では「十方世界をつくしてさらに辺際なし」とある。これは无辺の辺の字を辺際の義として、十方世界どこまでも辺際なしにてらしたまふゆへに无辺光と名ける。今の和讃に「きはもなし」とあるは、この无辺際の義なり。爾れば『顕名鈔』の初めの釋用ひねばならぬ。后の釋は『述文讃』と同じ事なり。『述文讃』は「真佛土巻」御引用なり。ゆへに、今家に於ては二釋ともに取用ゐるがよいなり。とき法身・般若・解脱の三徳の中で、法身・般若の二徳を上の二首の和讃におゝせられたわけは、昨日弁じた事なり。爾らばいま解脱の徳を、この无辺光の所へ御出しなされたはどう云わけぢゃと申すに、これは実云ふときは解脱の徳が无辺光に限る徳に非ず。外の光明の所へ御出しなされてもよけれども、今上の二首の和讃に次での如く、法身・般若の二徳を挙させられたゆへ、さしづめ解脱の徳はこの无辺光の所へむかふてあり。そこで、解脱の徳を爰へ結合せられましたものなり。その上へ『涅槃経』を爰へ引合すに『涅槃経』五七十右に三徳の中の解脱の徳を説

く所に「解脱ト者名テ云ニ无辺一」とありて、次の句に喩へをあげて「譬ハ如二聚落一皆ナ有二辺表一解脱ハ不レ爾譬ハ如三虚空一無レ有二辺際一」と。聚落と云は、京や大坂のやうな家のたんとある城下の事なり。長安十万戸と云廣ひ聚落なれども二里四方とか辺表のはてがあり、其辺表があらば无辺とは云はれぬ。今如来の解脱の徳は、周遍法界の解脱の徳ぢゃによりて廣大无辺際にしてきはほとりがなひなり。たとへば虚空の如くなるゆへに无辺と名くるとあり。これこの『涅槃経』の上からみれば、今无辺光のきはほとりのなひと云ことを顕はさんがために、解脱の徳をこゝへ挙げさせられて「解脱の光輪きはもなし」と仰せられたるなり。

21

「光触かふるものはみな」とは御草稿の御左訓に「ヒカリヲミニフルゝトイフコゝロナリ」とある。異本に「ことなり」とあり、丸の付てあるは異本なり。河州本なればみな鱗形が付てあり、河州本でなひ其外の本なればみな丸を付てあり。佛光寺本は「ことなり」と申してあるによりて其異本なり。この異本に付けた所があとから加へたのでみにくひなり。『高僧和讃』などからは最初から異本付をいたしたり。『浄土和讃』はあとから致したゆへ、みにくきなり。ときにこの御左訓に「ヒカリヲ身ニフルゝト云コゝロナリ」とは身にふるゝとあればからだにふるゝ事ぢゃが、弥陀の光明は衆生の内心の底に入り満させらるゝによりて、たゝ身にふれるばかりではありそもなひかと申すときに、これが法相の定まり事にて「ふれる」と云へば、かならず身にふれると申さねばならぬなり。色声香味触の五境の中の触境はからだでふれてしる境界にして、心は色法でなひものぢゃによりて心にはふれると云事はいはれぬなり。そこで今「光触」と云は、ひかりを身にふるゝ事ぢゃと御釈なされたものなり。されども身にふれるときは身の内心ろの底に入りみち玉ふなり。そこで『大経』に「触二其身一者心意柔軟」「その身にふるゝもの

心意柔軟」と説てありて、これ身に触るときは心ろにまで入り満させらるゝによりて身も心ろも柔軟になると云ことで、「触二其身一者心意柔軟」と仰せられた。今もそのこゝろで「光触」と仰せられたものなり。

22

「かふる」とは、かうむるの略語なり。「有無をはなるとのべ玉ふ」とは、「有無」と云は、有無の二見で、『法華経』の「方便品」には「有無の二見によりて六十二見を生ずる」と「科註」一の下三十一右に文があり。それを『法華文句』四の二五十四に釈して「有無の二見のことを又は断常の二見」と云なり。有見と云は、すなはち常見の事で一切有情こゝに死し、かしこに生じて、いつまでも常住なものぢゃと執するのが有の見。又無の見と云は、すなはち断見のことで、有情の五蘊が滅してあとはなんにもなしになりてしまう、過去もなひものぢゃ未来もないものぢゃと、断無の見を執するのは無の見なり。この有無の二見がもとよりあらゆる外道の六十二見を生ずると申してあり。又『大論』三十七七左には「一切世間皆着ス二有無二見ニ」とありて、外道にかぎりたことではなひなり。それゆへに『唯識論』ではこの有無の二見に分別と俱生とをば分ってあり。分別の二見と云は邪師邪教等によりて分別して起した所の有無の二見。外道の有無の邪見と云はこの分別起の二見なり。又俱生の二見と云は今日の衆生生れながらにして誰に習ふとなしに、この二見に住しておるなり。鳥や獣もの、類までもこの二見に住しておるが俱生の二見なり。これは『唯識論』六十六右に、鳥けだもの、類が猟師などにあへば怖れてにげるは、我身なくならうかと思ふによりて怖れてにげる。其我がなふならうかと思ふのがすぐに無の見なり。鳥けだものは誰が教へてしるではなけれども、生れながらにして無の見を以ておるなり。又鳥けだもの、類が穴をほりて食物などを后の貯に至しておくのは、我身いつまでもあると思ふからなり。其我身いつまでもあると思ふのが俱生の有の見なり。ときに聖道門の修行でこの

有無の二見を断ずる事は、同く『唯識論』六二十一左に、分別の二見は初地入見道のときに離れる。又俱生の二見は初地已上の菩薩漸く断じさせらるゝ。小乗でなれば分別の二見は初果の聖者になるときに断ずるなり。又俱生の二見は第四の羅漢果の聖者でなければ断じてましまさぬなり、と。又『唯識の述記』にある。初果已上の已離欲の聖者でも雷りの声を聞きて恐れるのは、わが身そこなふかと思ふ俱生の断見があるゆへぢゃ、とあり。

23

ときに聖道門の修行でこの有无の二見を断ずる事は、同く『唯識論』六十左二一に「分別の二見は初地入見道のときに離れる。又俱生の二見は初地已上の菩薩漸く断じさせらるゝ小乗でなれば分別の二見は初果の聖者になるときに断ずるなり。又俱生の二見は第四の羅漢果の聖者でなければ断じてましまさぬなり」と。又唯識の述記にある初果已上の已離欲の聖者でも雷りの聲を聞て恐れるのは、わが身そこなふかと思ふ俱生の断見があるゆへぢゃとあり。ときに今念佛の行者は凡夫なれども无辺光の光かによりて、たゝちに有无の二見をはなれるゝ云うことで、有无をはなるとのべ玉ふと仰せられた。爾らば念佛の行者、何れのときに有无の二見を離るゝぞと云に、『六要鈔』五三十左に「称二名号一依二佛願力一必蒙二光觸一自然ニ遠二離ス有无迷一ヲ此是光明照觸力也」文釋してあり。この『六要鈔』の御釋では自然にはなるとあるによりて、有无の二見を一時にはなれぬ光明にてらさるれば漸々にはなれることのやうにきこへるなり。これは祖釋のこゝろをもて云ときは、往相の一心を獲得するは「六趣・四生の因亡じ果滅す」とあるによりて、一念の信心おこるときたゝちに光觸を蒙りて有无の二見を一時に離るのなり。こゝをば先輩の弁ぜられたのは、他力の信心を吾祖は「欣浄厭穢之妙術」との玉ひ、信心を得る所がすなはち娑婆を厭ひ浄土を欣ふこゝろのおこる所、その娑婆を厭ふ心ろ我身いつまでもあると執する有の見をはなれたしるしぢゃ。執着の深ひ凡

夫なれどもしばらくの娑婆ぢゃとあきらめ、今にも知ぬ露の身ぢゃとしるやうになりたは有の見を離したすがたなり。又未来の浄土を欣ふ心のあるは、无の見を離れたしるしなり。いかさまはや目にみたこともなひ極楽が手に取やうに思はれて願ふこゝろのあるのは、今迄未来はなひものぢゃと執した无の見を離れた相なり。爾れば他力の信心をうるときに、有无の二見は一時に離れるによりて「光觸かふるものはみな有无をはなるとのべたまふ」との玉ふなり。

24

爾れば法の利益では分別のに見も倶生のに見も一念の所で一時に断ずるなり。されども凡夫の機の手前は、果縛のからだのある間だは貧瞋煩悩と同じことに、倶生の二見はのこりであるなり。夫ゆへに雷もこはがる。又今年から来年の貯へをすると云うやうな事のあるのは、倶生の二見がのこりであるすがたなり。今は浄土の得益をのべさせられるゆへ、有無をはなるとのべ玉ふなり。ときに今無辺光の徳を讃ずる所へ、この有無の二見をはなることをば述玉ふは、何故ぞと、云うに、是が第一句の「解脱の光輪」とある所を承ての玉ふのぢゃ。「解脱の光輪」を以て衆生の悪業煩悩をくだき破りたまふゆへに、この光触を篆るものは有無の二見を一時にはなれるとなり。夫ならば外の煩悩を御出なされてもよかりそうなものぢゃに、有無の二見を御出しなさるゝはいかがなるわけぢゃと云へば、是無辺光の徳を顕す無辺の辺の字は、辺畔の義にて一方へかたよる事なり。すなはちこの有無の二見の事をば辺見とも名けるなり。あるとかなひとか一方へかたよる所の見ゆへに辺見と云。今はかたよらぬ無辺光の光益あるゆへに、そのかたよりた有無の二見を離れしめ玉ふ無辺光の徳を顕す為に、「有無をはなる」と云事を御示しなされたものなり。

25

「平等覚に帰命せよ」とは、『大経』の異訳の『平等覚経』には、阿弥陀如来のことを「無量清浄平等覚」と申してあり。これは梵語では「三藐三菩提」、此には「平等覚」とも翻じ、又「等正覚」とも云なり。仏は一切諸法平等の真理をさとり玉ふゆへに、「平等覚」と云。すなはち道等しきがゆへに、大慈悲ひとしうして諸法平等の御証りぢゃによりて、其さとりから無縁平等の慈悲をおこして、一切衆生を平等に済度し玉ふが、平等覚のすがたなり。今無辺光の徳益によりて、不平等の有無の二見を破して平等ならしめ玉ふ、其徳をとり、すぐに仏名として「平等覚に帰命せよ」と仰せられたものなり。ときに御草稿の左訓に「アミタハホフシンニテマシマスアヒタヒヤウトウカクトイフナリ」とある。これは羽州の本・高田の本、この通りなり。ときに異本に「ホフシン」と云ところ「ホウシン」になりてあり。これが仮名ではまぎれるなり。「ふ」の字なれば「法身」、「う」の字なれば「報身」なり。この異本は仏光寺の本であるが、これは正しからぬなり。これは羽州本・高田本の「ホフシン」とあるが正しひなり。ときにこの御左訓に「アミタハホフシンニテマシマスアヒタヒヤウトウカクト云ナリ」とは、これは考るに『論註』下の「寂滅平等法身」をば、吾祖は真実報土のさとりの事になされるなり。そこで「正信偈」には「即証真如法性身」とあり、「文類の偈」には「即証寂滅平等身」とある。これ真実報土の阿弥陀如来は、寂滅平等法身のさとりなるゆへ、その報土に往生するものはみな、同一涅槃のさとりを開ひて弥陀と同く平等法身をさとると云が、祖師の思召なり。よて今此の「平等覚」もすなはち平等法身のさとりにて、阿弥陀如来は平等法身の仏なるがゆへに、「平等覚」と名けるとの御釈なり。

26

光雲無碍如虚空　一切の有碍にさはりなし
光澤かぶらぬものぞなき　難思議を帰命せよ

三には無碍光。初の一句は本偈の文のまゝをあげさせられるなり。御左訓に「ヒカリクモノコトクシテサハリナキコトコクノコトシ」とある。河州本の御左訓にはすこし言はちがへども同じ事なり。まず「光雲」とは、ひかりのくものごとくと云事で光明を雲にたとへさせられるなり。これをば註解の中に「光明を雲にたとへるは無碍の義をたとえたものなり」と申してあり。なるほどこゝは無碍光の徳を明す処なり。さて雲は無碍の義と云ことなひ事ではなひ。『探玄記』十五六十四右、『刊定記』十三本三右に、雲に六義があげて其中無碍の義と云があるなり。されども今この文には次の言に「無碍如虚空」とありて、光明の無碍なる事は虚空をたとへにしてある。爾るになんぞ煩重に雲をあげて無碍の義を喩へ玉はんや。爾らばなにをたとへたものぢゃと云に、『探玄記』十八五十七右に、梵語には迷伽と云ひ、此には雲と翻ずる。雲に四義がありて、一には普遍の義、雲と云ものはどこどこまでも普くゆきわたると云ことなり。二には澤潤の義、これは雲にはうるおひをそなへおるなり。大旱の雲霓をのぞむが如くなとゝ云て、雲にはうるほひの義をそなへておるによりて沢潤と云なり。三には蔭覆の義、蔭覆と云はおほひかくす事、雲と云ものはきついもので冨士山のやうな大きな山でも覆ひかくすと云、これ蔭覆の義なり。四には法雨の義、これは雲から雨をおこすと云義なり。今「光雲」と云は、この四義の中では普遍の義をたとへたものとみへるなり。余の三義もそなはりてはあれども、正くは普遍の義なり。夫はなぜと云に、全体この「光雲」と云言の出所は、『華厳経』とみへるなり。『六十華厳』四十八右に「観二察仏光明一ヲ如レ雲難思議」等とあり。同四十八左に「光雲華蓋難思議」とあるは、この光雲二所倶に難思議の言があり、今も終りの句に難思議と云仏名を御出しなされたからは、この「光

雲」と云言は『華厳経』の文からとりきたものとみへるなり。この『華厳経』の文みるべし。「光明如レ雲」とたとへて、其次に雲にたとへる義を述て「一切処悉見如三対二現スルカ目前一二」とある。これは雲と云ものは一切処へ遍満するものぢゃによりて、どこでみても目の前にあるが如くぢゃ。京都で云へば東山へ登りてみても雲が目の前にあり、愛宕山へ登りてみても雲が目の前にありて、雲はどこからどこまでもゆきわたる普遍の義なり。これが上の徳をば直ちにうけた言とみへる。さて次に「無碍如虚空」とは、こゝが正しく無碍光の徳をのべる所なり。光明に無碍の義があると云事、『涅槃経』三十六ニ一十右已下に、虚空に三義が説てある。其第二義が無碍の義なり。虚空と云ものはさはりのなひもので、虚空の中へ家を立てやうが林をこしらへやうが、自由自在にさはりのなひが虚空なり。弥陀の光明のさはりのなひ事を、其虚空に喩へなさるゝなり。

27

「一切の有碍にさはりなし」とは、御左訓に「ヨロツノサハリアルコト」とあり。「一切」とあるによりてありとあらゆるさはりの事なり。これは『述文讃』中四四十に「無レ有下人法トシテ而能ク障ル者上ノ故ニ無碍ナリ」とある。これは人のさはり、法のさはりがなひによて無碍と名けると云釋で、日輪はよく四天下をてらせども阿修羅王が怒をなすとき日輪を手につかむことがある。これは『正法念経』の説なり。これらは人のさはり。又雲霧にさへられるは法のさはり。今弥陀の光明は其人のさはり法のさはり一切のさはりにさへられることはなきゆへに、無碍と名けると云事で「一切の有碍にさはりなし」との玉ふ。とき上の「智慧の光明」の和讃の「有量諸相」と云を上の句へ望めると下の句へ望めるとの二義あるに准ずるに、この「一切の有碍」と云言にも亦二義を含むなり。上の句へ望めるときはこの「一切の有碍」と云は、あらゆる一切のさはりの事で、世間にあることは何事でもみなさ

はりがあると云を挙て、弥陀の無碍光は虚空の如くさはりがなひと云ことを顕したものなり。そこで河州本の御左訓には「ヨロツコノヨノコトナリ」とある。これは一切世間の事はみなさはりがあると是は上の句へのぞめる御釈なり。又下の句へ望めるときはこの「一切の有碍」と云は別して衆生の悪業煩悩のさはりをさしたまふなり。これは吾祖所所の無碍光の御釈みな左やうなり。『尊号真像銘文』右八には「無碍といふはさはることなしとなり、衆生の煩悩悪業にさへられざるなり。」とある。『唯信文意』右十九には「無明のやみをはらひ悪業にさへられず。ゆへに無碍光とまふすなり。無碍は有情の悪業煩悩にさへられずとなり」と。爾ればこの「一切の有碍」と云は吾祖の意、別しては衆生の悪業煩悩のさはりの事。其さはりにさへられぬ無碍光ぢやと云事で「一切の有碍にさはりなし」との玉ふ。夫を次の句に「光澤かぶらぬものぞなき」と承たものなり。

28

あの「もの」と云言は、人を指なり。衆生の悪業煩悩にさへられざる無碍光なるが故に、この光沢をかぶらざるものは一人もなひと云事なり。「光沢」と申すは、「沢」は『慧林音義』十二右に『毛詩』の伝を引て「沢は潤也」と釈してあり。これ雨のうるほひの事なり。そこで御草稿の異本の御左訓に「沢」の字に「ウルオウ反」とある。あの反しとあるは、其文字の訓を付るときにつかふなり。漢土の反切は日本の仮名附なり。こりゃこう云字ぢゃと云かな付なり。今日本ではこの沢の字はうるほうと云字ぢゃと云のが、これが漢土の反切と同じこと故に反との玉ひた。ときに、「ウルホウ反」と云上へに丸点がなければならぬなり。これは先達ても云た延寿寺の元祐と云人の伝へた本なり。羽州本にも河州本にもなひよりて、丸を付ねばならぬなり。ときこの「光沢」と云言は、第一句の「光雲」と云言から出た言にて「光雲」と云。雲には沢潤の義がある。これは上に『探玄記』を引て云如く、沢潤

の義があるなり。弥陀の光明を雲にたとへるからは、雲にはかならず雨のうるおひがあると云ことで、第三句に「光沢」との玉ふた。ここを御草稿の御左訓に「ヒカリニアタルユヘニチヱノイテクルナリ」と云。これは雨のうるおひによりて草木ことごとく芽を生ずる如く、阿弥陀如来の無碍光の光明の雨のうるおひによりて衆生の智慧の芽を生ぜしめ玉ふ。夫ゆへに今「光沢」の御釈なり。御左訓で和讃を解するほどな、たしかなことはなひ。祖釈をもて祖釈を解するのぢゃによりて、祖師の思召の顕れそふな事なり。

29

ときに此に「ものぞなき」とは、宿善到来の行者は一人としてこの光沢をかふむらぬものはなひと云事で、「かぶらぬものぞなき」と仰せられたものなり。ときに手仁葉の法に「そるこそれ」と申す事がありてぞと云へば、「る」ととめると云が常の格なり。こゝは「ぞ」をきてとめてあり。こゝをば『嘗解』などにはこれは「ものこそなけれ」と云を略して「ものぞなき」と云たものぢゃ、まづ「こそ」を略して「ぞ」と云ひ、又「けれ」の反し「け」とかへるによりて、夫をかきくけこの通音できと通ずるゆへ、「ものこそなけれ」と云を「ものぞなき」との玉ふたものぢゃとあるが、左ではなひ。「そるこそれ」と云は、手仁葉の大略を云たので委しき事ではなひ。是は「ぞ」をきて「る」とめると云格は、外に例のある事で『古今』二の巻春の部に「残(ノコ)りなくちるぞめでたき櫻花ありて世の中はてしなければ」とある。これ「ちるぞめでたき」と「ぞ」をきてうけてあり。又『古今』四の巻秋の部に「かくばかりをしとぞおもふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへぞうき」とある。これも「ぞ」をきてうけてあり。この全体なしと云言も、なきと云言も、文字でかけば無の字にして、ともになひ事なり。ともになひ事なれども、上に「は」と云へば下を「し」でとめる、上に「ぞ」と云へば下を「る」でとめると云が、手仁葉の法なり。又「あ

りあけのつれなくみへしわかれよりあかつきばかりうきものはなしは」と云たによりて、「し」でとめねばならぬなり。如レ此、今もこの和讃に、上の「智慧の光明」の和讃では「光暁かぶらぬものは」とあるによりて、「なし」と「し」でとめてあり。今こゝは「光沢かぶらぬものぞ」とあるによりて、下を「き」でとめてあり。よく手仁葉の法にあふてあり。

30

「難思議を帰命せよ」とは、この「難思議」の言、上に引た『華厳経』の言によらせられたとみへるなり。其上これは『勝鬘経』二右のところに「敬礼難思議」とあり。今本偈の文に「頂礼難思議」とあり。能く言が似てあるによりてこの『勝鬘経』の言をとり用ひなされたともみへるなり。『實窟』上末二右に「心行滅スルガ故二不レ可レ思言語断スルガ故二不レ可レ議」とありて、心にもおひつくされぬ言にものべつくされぬゆへに、佛徳の思議しがたひことをほめて、佛を「難思議」と称したのなり。とき今この和讃へ「難思議」の佛名を御出しなされたは云何と云に、これは今無碍光の徳を以て衆生の悪業煩悩にさへられずして、具縛の凡愚をやすく助け玉ふは、一代経に超過せる難思議の利益なり。こゝが佛法不思議と云ことは弥陀の弘誓になづけたりと云。本願一乗の不可思議の利益にて、其徳をとりてすぐに佛名につけて「難思議を帰命せよ」と仰せられる。其上最初の句に「光雲」と云、即ち『華厳』の文に「光雲難思議」とあるによりて其言を取たものなり。ときにこの「難思議を」とある「を」の字を御草稿の本には「何思議に」とあり。これは羽州の本、高田の本みな同じことで残らずみな「に」の字になりてあり。今家の本には上の「平等覚」までは「に」と仰せられ、これから下はみな「を」の字になりてある。下でも「清浄大攝受に」と云ところなどは「に」となりてある。『古今』の八巻目の離別の部の言は「あふさかにて人に別れけるときよめる」

とあり。又「おとは山のほとりにて人をわかるとてよめる」とある。「人にわかる」とありそふなものぢゃに「人をわかる」とはこれは『古今』の中には「人を」と「人に」とを遣ひわけてあるなり。

31

「人をわかれる」とは、向ふの人が旅へゆくときのことぢゃ。自分は京都に居ながら、向ふの人が下へ下るときなり。又「人にわかれる」と云は、自分が旅へゆくことなり。向ふ相手は京におれども、自分が旅へゆくときの事なり。「人を」と云へば、向ふの人をかぎる言になる。又「人に」と云へば、自分をかぎる言になるなり。今も「難思議を」と云へば所帰命の仏をかぎる言になるなり。十方の諸仏は多けれども、こふ云徳のすぐれた難思議を帰命せよと云ことになるなり。有縁の道俗はやくこの平等覚に帰命せよと御すすめなされる言になるなり。所帰命の仏を限る義も、能帰命をすすめる義も、共になければならぬなり。そこで御草稿の本には「に」とあり、今家の本には「に」と「を」とをまぜて御つかひなされたは、両方ながらそなはらねばならぬと云ことを顕す思召なり。

第十三会

32

清浄光明ならびなし　遇斯光のゆへなれば
一切の業繫ものぞこりぬ　畢竟依を帰命せよ

四に無対光。十二光の中の第四の無対光の徳なり。十二光仏に科段をわけてみるときは上来、明す処の無量光・無辺光・無碍光の三光は光明無量の体徳を顕す一科なり。これから下の無対光・炎王光が第二科にして科目を立てゝ

云へば、対他顕勝の徳なり。弥陀の光明は、あらゆる諸仏菩薩の光明に勝れて他に並ぶものはなひ最尊第一の光明ぢゃと顕すのがこの一科なり。さて「清浄光明ならびなし」とは、「ならびなし」とあるが正く無対光の義をのべさせられるので無対と云。対は比対の義でならべ対することなり。弥陀の光明は、甚だすぐれて外にならべくらぶる光明はなひと云ことで無対光と云なり。ときに今、無対光を讃ずる所に「清浄光明」と云ひかけさせられたは云何と云に、「清浄」と云は慈恩の『理趣分述讃』中二十左に「自性潔白ナルヲ名レ清離二諸垢染一ヲ名レ浄」とある。この釈に准じて今、「清浄光明」を釈せば弥陀の光明の其体潔白にしてきよらかなるを清と云、その上に無漏清浄業よりおこる所の光明で、もろ々々の業煩悩のけがれを離れ玉ふ所を浄と云、すなはち鸞師の『論註』上巻に、弥陀の浄土の光明の第一無比なるすがたがのべてあり。

33

今時の金よりは佛在世の金がすぐれ、佛在世の金よりは、閻浮檀金がすぐれる、と云やうに段々くらべて、いつち終りの他化自在天の光明を、弥陀の浄土の光明にくらべてみるに、くらべものにならぬと云ことをのべさせられ、夫を結んで何故に弥陀の光明かくの如く第一無比なり、と云へば有漏業所感の人天の光明とは違ふ、法蔵菩薩の清浄業より顕るゝ光明なるがゆへに、かくの如くすぐれてある、とあり。今こゝへ「清浄光明」と云言を出させられたも、その如く弥陀の光明は因位永劫の、無漏清浄業より顕るゝ光明なり。ゆへに第一無比と、外にならびのなひ無対光ぢゃと云事で「清浄光明ならびなし」との玉ふ。これは鸞師の『論註』でもて鸞師の『讃弥陀偈』を伺へばこの通りなり。さて御草稿の御左訓に「スミキヨシ」とある。これは字のこゝろをのべさせられて其次の「トムヨクノツミヲケサムレウニシャウ々々クワウミヤウト云ナリ」とある。この御左訓や『御假名聖教』に「レウ」と云

言があり。あれは「ために」と云事なり。とむよくのつみをけさんために、清浄光明をば御満足なされたと云事なり。この御釋は清浄光明を化他に約して御釋なされるなり。

34

衆生の業煩悩を清浄になされる事、次の句の「遇斯光のゆへなれば　一切の業繫ものぞこりぬ」と云からみれば、衆生の悪業煩悩のけがれたを除ひて、清浄にしたまふ光明ぢゃによりて、「清浄光明」と云との御釈なり。夫ならば、この御左訓に貪欲の罪ばかりを挙げ玉ふは云何と云に、これは下の「清浄光仏」をば、『述文讃』の釈に「貪欲の煩悩をけしほろぼす光明によりて清浄と名く」とあり。この『述文讃』の御釈は、吾祖の御依用で「真仏土巻」の御引用なり。今ここの「清浄光明」をば、其『述文讃』の御釈を直に取り来て御釈なされるのなり。憬興の『述文讃』には、すでに化他に約して釈したでなひか。爾れば、今この「清浄光明」と云も、化他に約して釈するはづぢゃ。『述文讃』の釈を直にここへ以てきて、ここの釈になされる思召で、「貪欲ノ罪ヲケサンレウニ」との玉ふなり。ここの「清浄光明」が、貪欲の罪にかぎると云事ではなひ。「一切の業繫ものぞこりぬ」とあれば、あらゆる悪業煩悩を清浄にしたまふ光明ぢゃによりて、そこで「清浄光明」との玉ふなり。「遇斯光のゆへなれば」等とは、「遇斯光」と云は、このひかりにあふと云事。夫を御左訓に「弥陀仏ニマウアヒヌルニ」とある。これは吾祖のつねにの玉ふことで、『唯信鈔文意』には「阿弥陀仏は光明なり」と。又『一多証文』には「この如来は光明なり」とある。光明をはなれて弥陀の果体はなひによりて、阿弥陀仏をすなはち光明ぢゃとの玉ふ。そこで、このひかりにあふと云は、弥陀にまうあひたてまつることぢゃ。其「まうあふ」と云を『一多証文』には、「まうあふと云は本願力を信ずるなり」とある。爾れば「遇斯光」と云は、弥陀の本願力を信ずる事ぢゃと御覧なされるが、吾祖の思召なり。

35

「一切の業繋ものぞこりぬ」と云は、「業繋」と云は御左訓に「ツミノナハニシハラル、」とある。これは業と云罪業のことよりて、「ツミノナハニシハラル、ナリ」とあり。煩悩によりて業を作り、業によりて有情を三界の牢獄に繋縛することを「業繋」と云なり。今、本願力を信ずる端的に、無対光の力によりて忽ちに一切の業繋縛を除かせらるゝと云ことで、「遇斯光のゆへなれば　一切の業繋ものぞこりぬ」とあり。この「業繋も」の「も」の字、別にこゝろはなし。たゝ語の助けにおかせられた「も」の字なり。『拾遺集』上雑歌の部に「かくばかりへがたくみゆる世の中にうらやましくもすめる月かな」と云、この「も」の字などはた々語の助けにつかふたもので、今もそれと同じ事なり。

36

「のぞこりぬ」と云うは「りぬ」の反「ル」と反「ル」によりて、「のぞこる」と云事ぢゃ。或はこの「ぬ」の字「畢んぬ」の「ぬ」なり。この「ぬ」の字に不の「ぬ」と、「おはんぬ」との差別のあることなり。不の「ぬ」と云は、不の字のかはりにおく「ぬ」の字なり。「明日も　しらぬいのちにてこそ候ふに」とある。しらぬの「ぬ」の字は不の「ぬ」なり。明日もしらざることを「明日もしらぬ」との玉へり。又信心決定しぬればかならず真実報土に往生するとある。あの「ぬ」の字などはおはんぬの「ぬ」字なり。信決定し畢りたことを信心決定しぬれば、との玉ふなり。今がそのおはんぬの「ぬ」で、本願力を信ずる所で、業繋こと々々くのぞこりおはんぬと云ことで「一切の業繋ものぞこりぬ」との玉ふ。ときにこの本偈の文に「遇斯光者業繋除」との玉ふたは、もと『大経』の「遇斯光者三垢消滅」の文によらせられたものなり。『大経』の文初に十二光を列ねて其次に「其有衆生遇斯光者

三垢消滅」と云うから下は、上の十二光の得益を御説なされる経文なり。鸞師其光明の徳益を説た経文をば、巧みに上の十二光へ御當なさるゝなり。そこで今「遇斯光者三垢消滅」の文を無対光へ配當なさる。なにゆへに又この経文を無対光へ御當なさると云へば、鸞師の思召は無対光の字に兼ては敵対の義があると御覧なされるのなり。これは『大経』の浄影の『疏』上五右に「他光不敵名無対光」文と弥陀の光明に敵対するものがなひと云事で無対光と云なり。今鸞師も兼て其義を取なさるゝゆへに、「遇斯光者三垢消滅」の文を無対光の下へ切り合せ玉ひて、弥陀の光明に適対する業煩悩なし、一切の罪障こと々々く消滅するゆへに無対光と名ける、と云こゝろで「遇斯光」等と仰せられたるなり。

37

「畢竟依を帰命せよ」と云は、畢竟帰依処と云事にて、『観仏三昧経』九初左に仏の異名を挙る所に「大帰依所と名ける」と説てあり。仏は一切衆生の帰依所なるがゆへに、大帰依所と名ける。又『勝鬘経』十四右に仏を究竟帰依とする。二乗等は少分の帰依所にして、究竟の帰依所に非ず。仏ばかりは究竟の帰依所ぢゃと説てあり。今それらのこころを取て、弥陀を畢竟依との玉ふなり。先「畢竟」と云は、御草稿の御左訓に、「畢」の字「オハリ反」「ツイニ反」「竟」の字に「オワル反」「キワム反」とある。これは畢竟の二字の和訓を出し玉ふなり。依の字の左には「ヨル反」との玉へり。爾れば畢竟と云は、おはり・おはると云事で、一口に云へばおんつまりと云事ぢゃ。一切衆生機宜まちまちにして、薬師に帰依するもあり、釈迦に帰依するもあり。繋属結縁種々なれども、おんつまりの帰依所と云は弥陀ぢゃと云事で、「畢竟依」の名を御出し玉ふ。ときに、今無対光の所へ「畢竟依」の名を出し玉ふは如何と云に、無対光と云は外にならべくらべがなひ事。又いかなる業煩悩でも敵対する事ならぬ事なり。爾れば、

諸仏菩薩の手にもれた造悪の凡夫を、ことごとくたすけ玉ふは無対光仏ぢゃよりて、一切衆生のおんつまりにはこの仏へ帰依せねばならぬ故に、「畢竟依」の名をここへ御出しなされたものなり。ときに、御草稿の御左訓に「ホフシンノサトリノコルトコロナクキワマリタリトイフ心ナリ」とあり。この御釈つ井みではきこへぬなり。これを『嘗解』の中では「ホフシン」とあるを「ホウシン」と書かへて解してあるゆへに、大ひに御左訓の思召にそむひてある。上の「平等覚」の御左訓の「ホフシン」とあるのは、仏光寺本もみな「ホフシン」とある。爾れば、ここで嘗解者が解しがたひゆへに「ホウシン」とかきかゑたなり。律義そふな顔で横着なことなり。

38

この御左訓は吾祖『勝鬘経』の「究竟帰依」と云言に御依りなされたものなり。然るに其『勝鬘経』の前の文四十左に「涅槃界者即是如来法身ナリ得二究竟法身一者則究二竟ス一乗ヲ一」とある。「究竟法身」と云は大般涅槃の事なり。法身と云は涅槃の異名。今は佛の大涅槃なるがゆへに「究竟法身」と云。このさとりをうるものは佛けばかり。一切の衆生にこの「究竟法身」をさとりゑたものはなし。佛ばかりなり。よりて佛は究竟の帰依所ぢゃと云『勝鬘経』のこゝろなり。其こゝろで御釋なされるゆへに「ホフシンノサトリ」等との玉ふたものなり。あの「ノコルトコロナクキワマリタマフ」との玉ふたは「畢竟」・「究竟」の文字のこゝろなり。「究竟」とは『探玄記』五十左六五に「盡二彼ノ原際ヲ一云二究竟ト一」とありて、はてのはてまでをのこらずきわめつくす事なり。「畢竟」と云は、『大論』三十一十二右に「令レ無二遺餘一故二名二畢竟空一若シ少モ有ハ遺餘一不レ名二畢竟一」とありて、すこしばかりものこらぬやうにきはめおはる事で「畢竟」と云なり。これこのときには「究竟」と云よ「畢竟」と云が義が同じことなり。

39

そこで『勝鬘経』の「究竟法身」と云ものをとり来て、今『讃弥陀偈』では「畢竟依」と御名けなされたものぢゃとあるのが、吾祖の御釈のこゝろなり。ときにこの御釈「行巻」へてらしてみるになを思召の含であること、みへるなり。「行巻」に一乗海を御釈なされる所に今の『勝鬘経』の言をとりて「得二究竟法身一者則究二竟一乗一（乃至）唯是誓願一仏乗也」とあり。『勝鬘経』の文を随宜轉用して、弥陀の本願一乗を御明しなされ、極楽浄土は涅槃の域無為涅槃ぢゃ、それぢゃによりて、弥陀の浄土に往生せねば「究竟法身」の大涅槃をさとることはかなはぬ。一切衆生ついに本願一乗の利益によりて弥陀の浄土へ往生して大涅槃をさとる。これが誓願一仏乗の利益ぢゃと御明しなされるが「行巻」のこゝろなり。この「行巻」に准じてみれば今御左訓に「究竟法身」を御出しなされたは一切の衆生、ついにはこの弥陀に帰命してこの弥陀の「究竟法身」をさとるより外にさとる道はなひなり。夫ゆへに阿弥陀如来を「畢竟帰依所」と名けたてまつると云こゝろなり。

40

仏光照曜最第一　光炎王仏となづけたり
三塗の黒闇ひらくなり　大応供を帰命せよ

五に光炎王。十二光の中、第五に炎王光の徳なり。『大経』には「炎王光仏」とあり。『讃弥陀偈』に「光炎王」とあり。是は異本によったものなり。唐本・宋本の二本には「光炎王仏」とあり。明本・麗本・現行の三本には「炎王光仏」とあり。十二光の中、正く諸仏にすぐれた事を顕すが光炎王なり。其旨は『大経』の文を、異訳に当てて見るべし。『大阿弥陀経』上三十「諸仏中王也光明中之極尊也」、『平等覚経』上右十四「諸仏光明之王（乃至）光明中

之最極尊也」と。是が光炎王の異訳の経文なり。現行の本に「炎王光仏」と説を、異訳には光明を讃嘆する言になりてある。爾れば、諸仏に勝れて最尊第一と云事を示すが、この光炎王なり。

「仏光照曜最第一」とは、これは『讃弥陀偈』の文のままを御出しなされたものなり。「照曜」と云は、河州本の御左訓に「テラシカ、ヤク」とあり。弥陀の光明は、つねに十方世界をてらしかがやかせらるることを「仏光照曜」と云なり。「最第一」と云言は、『大経』の「威神光明最尊第一」の文に御よりなされたり。「第一」と云ふ言は、第二第三へ対して第一と云事もあれども、今は爾らず。第一義諦の第一などと同じ事で、すぐれた事を第一と云のなり。『大乗義章』一六十左に「第一是其顕勝之目」とあるのが、ここへ合ふ釈なり。左訓に「サイハコトニモトモスクレタリトイフコ、ロナリ」とある。「第一」とあるがすぐれた事ぢゃに、其上へ「最」の字を加へたは、もともすぐれたることをあらはすと云御釈なり。ときに、これから下の和讃、第二句へ仏名を御出しなされた所は、みな第一句をもて第二句の仏名を釈すると云明し方なり。

41

そこで今もこの第一句の「仏光照曜最第一」の言で、第二句の「光炎王」の三字をば次での如くに釈したものぢゃ。まづ「光炎王」の字は、阿弥陀仏の光明の事ぢゃによりて、夫を釈する意で第一句に「仏光」と仰せられた。次に「炎」の字は炎々は美盛の貌ちと註して、火のさかりにもへてらしかゝやくすがたなり。今は弥陀の光明の十方世界をてらしかゝやき玉ふかたちを「炎」と云によりて、そこであの第一句の「照曜」の二字で「炎」の字を釈したものなり。次に「王」の字は、阿弥陀の光明は諸仏中の王、光明中の極尊なり、と云事で「王」との玉ふ。爾れば第一句の「最第一」の三字で「王」の字を釈したものなり。天に二つの日なく国に二人の王なし、諸仏光明所不

能及の最尊第一の光明なるがゆへに「王」と名ける、と云こゝろなり。「三塗の黒闇ひらくなり　大応供を帰命せよ」とは、これは『大経』の「若在三塗勤苦之処」等の経文をば、鸞師、この光炎王仏の徳に切り合せられるのなり。ときに『大経』には「三塗」とはあれども「黒闇」とはなひがと申すに『方等大集経』一三左に「如来／光明勝レテ一切能壊三三悪道／黒闇」とある。そこで『大経』の「若在三塗」へ「黒闇」の言を加へて「三塗の黒闇ひらくなり」と仰せられた。「三塗」と云言は、『玄応音義』四三十左にこの「三塗」と云言はもと俗書の言なり、夫を翻訳の三蔵が仏経を翻ずるときに其俗書をかりて三悪道の事を「三塗」と翻訳したものなり。その俗書と云は五経の中の『春秋』の中に「三塗危険之処」とあり、其「三塗」と云たは漢土に於ての甚だ辺僻の険難処にして、みな唐土で罪人を流罪にあわせるところなり。そこで義が能く合によって、翻訳して「三塗」と云たものなり。

42

次に「塗」の字を釋して「塗は猶〻道也」と云て、みちすぢの事で、地獄餓鬼畜生の三悪道ぢやによりて三途と名ける。これは「塗炭の義を云には非ず」とある。これは舊譯家の説をえらんだものなり。この塗炭と云は、これは『書経』の文字にしてはなはだ難儀な水責火責にあふ事を塗炭と云なり。今三塗の字が其塗炭の字なれども、今は塗炭の義ではなひ、途は道の義ぢゃと云、『玄應』の釋なり。浄影の『十地義記』四本二十一左に「塗」の字をば塗毒の義に釋してあり。これが『玄應音義』の破した塗炭の義と同じ事ぢゃ。この塗の字が塗毒と云ときには、きつい難義な事ぢゃ。三悪道へおち難義な苦しみをうけるによりてそこで塗と名けると云、こりや舊譯家の釋なり。「黒闇」と云は、つねには愚痴の無明を黒闇に喩るなり。愚痴のやみにとちられておるのは三塗にかぎりた事はなひ、人天もみなのこらず無明のやみの夜にすまひふしておるのぢゃ。今は別して三途の事を黒闇と仰せられたによりて、

これは依報に付て黒闇と仰せられたものぢゃ。三途幽冥な處と云て、日月の光りのなひ幽冥のまつくらやみなるところが、三悪道ぢゃによりて、そこで三塗の黒闇と仰せられたなり。

43

「ひらくなり」と云は、本偈の文に「蒙光啓」とありて、ここは啓の字なり。「陽気の開レ物云レ啓陰気の閉レ物云レ閉」とありて、この啓の字は閉の字に対する言にて、三塗の外にあるものに対する閉塞諸悪道ととぢふさぐなり。今は三塗幽冥の処にある衆生なるがゆへに、光炎王のひかりをもて其三途の黒闇をひらきやぶり玉ふと云事なり。これは『大経』の文には「若在三塗勤苦之処見此光明皆得休息無復苦悩」等とあり。三悪道の衆生でも、もし因縁ありて弥陀の光りを見奉れば、忽ちに三途の苦患をのぞこり、命終りて浄土へ往生して解脱をうると説た経文なり。これを今、鸞師光炎王の下へ切り合せられたは云何と申せば、まづ「炎」の字、第一句には「照耀」とありて、十方世界をてらしかがやき玉ふすがた。そこで、ここへ三塗のくらやみを御出しなされて、三塗の黒闇にあるものでも、宿因深厚のものは、この光炎王をもて照しかがやき玉ふゆへに、三塗の黒闇開き破りて解脱をゑせしめると云思召なり。其上に、六道の衆生の中でも三悪道の純苦処にある衆生は、別して極重の悪人なり。爾るに今、最尊第一の弥陀の光明なればこそ、極重悪人の衆生、この光明を見奉れば忽に解脱をうると、光炎王の徳を顕す為に、「若在三塗」の経文をば、ここへ御出しなされると見へるなり。

44

ときに『嘗解』の中に『六要鈔』を引て、人間天上でさへも仏をみる事はかなはぬに、何ゆへに三途の衆生が弥

陀の光明を拝て解脱をうるやと云論があれども、これは論に及ばぬ事なり。この『大経』の文に「若在三塗勤苦之処見此光明」と説くは、三悪道の衆生常に弥陀の光明を拝むと云事でなひ。もし別因縁の衆生があれば、三塗にありてもこの光明をみ奉る事がある、この光明を見奉れば忽ちに解脱をうると説た経文なり。人間天上の人でも別因縁のある人なれば、弥陀の光明を拝して利益をうるは勿論なり。経文には光明の利益の希奇を顕さんが為の事。ときに『嘗解』の中に『六要鈔』を引て三塗の衆生が弥陀の光明を拝して解脱をうると云は、『心地観経』三ハ左に、地獄へ堕たものでも、あとにのこりておるところの子供が追善追福をなせば、其とき大金色の光明が地獄を照して其光明の中に法を説て、地獄へ落て居る所の父や母を発心せしめると云事が説てあると云。

45

爾れば今三塗の衆生が弥陀の光明を拝んで解脱をゑると云は、娑婆で追善追福をなすときの事ぢゃと云に付て、『嘗解』の中にはもとも長ふ論じてあり。其嘗解者のつゞまる所の料簡では、當流におひて、年忌佛事をつとめるのは佛恩報謝ではあれども、その佛事をつとめるに付ては佛力を以て、さき達た者をば済度したまへと念ずるこゝろはありうちの事ぢゃと云料簡なり。これが嘗解者・連環解者の一僻にして、亡者の為の運心回向をば一分ゆるされるやうにみへるなり。今謂くこの『大経』の「若在三塗勤苦之處」等の経文は、弥陀の光明の利益を説く文にして、追善追福の事を説た経文でなはひ。地獄へおちた其衆生が宿因深厚なもので、其宿善の開た所で弥陀の光明をまのあたりみるなり。其とき解脱をうると説く経文なり。夫をば『心地観経』の文と合せ論ずるはよろしからぬ事なり。

46

最『和語灯録』七二十五左に「ひとの問に答へる御教化なき人のために、念仏を回向しまいらせ候へば、阿弥陀如来ひかりを放て三悪道をてらし苦慮をのがれしめ玉ふ。夫ゆへ『大経』に「若在三塗勤苦之処」等と説てある」と云てあり。又『黒谷伝』五にも出てあり。これは元祖の其機に対して、しばらく自力回向を許させられる随他意の説ぢゃ。元祖には是が随分あり、初めて日本に於て浄土門興行の元祖ぢゃ。これほど専修の法門がひろまりたる今時でも、他宗の多ひ所などへ行くと、当流の正意はあたまからは申されぬ。まして況や、元祖初めて専修の念仏を興行なされるのぢゃによりて、其機に対するところの随他意の説はなけねばならぬ。元祖、随自意の御釈は、『選択集』の「二行章」に、回向不回向対の一対を立て、他力の念仏はすべて回向を用ひぬ、と云が黒谷の正意なり。爾れば、専修の行者は念仏をもて、自身の往生の業とさへ計らはぬもの。況や、亡者のためにとなへて念仏を回向すると云事はなひ事なり。当流では、『歎異鈔』に「親鸞は父母孝養の為とて一返にても念仏申したる事いまだ候はぬ」とある。これが吾祖の御定判なり。一返の念仏でも、亡者の為と回向するこころありてはならぬ。法事仏事をつとめるのは、みな親の年忌・子の忌日を縁として、仏恩報謝のつとめをなすのなり。つとめる仏事に付て、すこしばかりでも運心の回向をなすと云事は、決してなひことなり。

47

「大応供を帰命せよ」とは、「応供」と云は、供養を受るにたゑたる事で、御草稿の御左訓「応」の字に「カナフ反」と云和訓を御つけなされる。応ずると云はこたえる。そこで御左訓の次の文に「一サイシユシヤウノクヤウヲウケマシマスニコタヱ」等とある。これは『大論』二二十に梵語は阿羅訶と云ひ、こゝには「応受供養」と云。「応供」

は具さに云ときは「応受供養」と云なり。ほとけはもろ々々の煩悩を断じ盡して一切智をゑてまします、夫ゆへに一切天地の衆生の供養をうくるにたへたるがゆへに「応供」と云なり。夫なれば「応供」と云は仏の十号の一なり。今「大」の字をつけて「大応供」と仰せられたは、これは声聞の阿羅漢果も煩悩障を断じてござるによりて、そこで「応供」と名ける事がある。夫へ対して「大応供」と仏を申してもよろしひなり。けれども今、祖意で伺ふに吾祖こゝにかぎりて「大応供」の左りに「ミタニヨライナリ」と仰せられた。これ「応供」といふは十号の一で諸仏の通号なり。夫に「大」の字を付るは阿弥陀如来にかぎると云思召とみへるなり。夫はなぜと云に今、光炎王の徳をもて云ときは、弥陀は諸仏中の王なり。光明中の極尊なり。爾れば諸仏をみな「応供」と名けるは、たとへば天下の諸候各ゝ一国を領する如く、今弥陀如来は一天四海を領する大王の如く、一切天地の衆生の供養をうくるにたへたるは、阿弥陀如来ばかりなり。夫ゆへに「大」の字を付て「大応供」と名けると仰せられる思召とみへるなり。

48

第十四会

道光明朗超絶せり　清浄光仏とまふすなり

ひとたび光照かふるもの　業垢をのぞき解脱をう

六に清浄光。十二光の中の第六の清浄光の徳なり。十二光を六科に分つときは、これより下が第三科にて清浄・歓喜・智慧の三光一組の光明なり。夫ゆへに吾祖御依用の憬興の『述文讃』では、この三光を次の如く三善根と三毒とへ配當してあり。仏にありては無貪・無瞋・無痴の三善根、衆生にありては貪欲・瞋恚・愚痴の三毒、阿弥陀如来因位永劫の修行に衆生に替て無貪・無瞋・無痴の三善根を成就し玉ひ、今果上に於て其三善根からこの清浄・

歓喜・智慧の三光を以て、一切衆生の貪・瞋・痴の三毒を対治すると云が憬興の釈なり。依てこの三光に科目を立つるなれば、化他滅惑の徳と云。上の無対光・炎王光の二徳は弥陀の光明の他に対して、勝れたる事をば述るゆへに、外にならふものゝなひと云事を上みの二光で顕し竟りたり。そこでこれから下の三光は、科段がかはりて弥陀の光明の徳をば御述なさるゝなり。

49

「道光明朗超絶せり」と、この一句を末書の内でも『私記』『註解』などにも「道光明」と「朗超絶せり」と、二段にきりて釈するは非なり。これは今家の本の御左訓に「ミタノヒカリアキラカニスクレタリ」と。これが三段に切てみる御指南なり。三段と申すは「道光」と「明朗」と「超絶」と三段に切てみるなり。「道光」と云は、多義がありて集めてみれば五義ほどあれども、其多義を弁ずるには及ばぬなり。これは『大乗義章』十八五十四左には「梵語には菩提此に曰道」。これが旧訳家の定り事、新訳では「覚」と翻ずる。夫を旧訳で「道」と翻ずるは、道は通の義なり。自由自在にとをられるところでなければ道でなし。そこで道の字に通の義があるなり。今は仏の果徳の円通自在なる処を道と名けると云が、『大乗義章』の釈なり。爾れば今、道といふは弥陀の菩提の証りの事なり。其菩提の証りから放ちなされる光明ぢゃによりて「道光」と云。夫ゆへ御左訓に「弥陀ノヒカリ」とあり。次に「明朗」、これは御左訓に「アキラカニ」とありて、朗の字も明なりと註する文字なり。和訓には、ほがらかと訓ずるによて、そこで御草稿の御左訓に「ホカラカナリ反」とあり。ほがらかなと云言は古ひ言なり。月の光りなどのさへて明な事を、ほがらかと申すなり。そこで、やはり明な事なり。夫ゆへ今の御左訓には「明朗」の二字を一処にして「アキラカニ」となり。次に「超絶」の御左訓に「すぐれたり」と。これは、超は超勝で、こへすぐれたこと。

絶の字は、たへると云文字であれども、絶妙などと熟するときは、すぐれた事を絶と申すなり。夫ゆへ御草稿の御左訓に「タエタリ反タエタリトイフハ止マフスナリ」とあり。爾れば、「超絶」の二字、ともにすぐれた事ぢゃにより、今家の本の御左訓には「スクレタリ」とあり。爾れば、「明朗」と云は、弥陀の光明のきよく明かなるかたちなり。「超絶」と云は、たえすぐれたる事。これが「清浄光明」の清浄の義を御釈なされるのなり。第一句を以て第二句の仏名を釈すると申す。前後の例にして、「明朗超絶」もて「清浄光仏」の義をば御釈なされたものなり。

50

こゝが憬興の『述文讃』の釈とはちがふ所にて、憬興はたゝ化他の徳に約して釈するゆへに、衆生の貪濁をけしほろぼす光明なるがゆへに「清浄」と名ける。貪濁と申すは、一切煩悩の中に於て貪欲ほどにごりきたなひものはなし。夫をけしほろぼす光明ぢゃによりて清浄光と名けると化他の徳に約して釈するが憬興の釈なり。今、鸞師の『讃弥陀偈』は夫と違ふて弥陀の光明の色相のきよらかなる処を清浄と云とある御釈なり。夫ゆへに『讃弥陀偈』の文には「道光明朗色超絶」と云て「色」の字あり。鸞師の思召では法蔵菩薩の無漏清浄業より感じ顕す光明ゆへに、其色相は甚だきよくあきらかなる処を清浄光と名くる御釈なり。爾れば鸞師は色相に約して清浄を釈し、憬興は化他の徳に約して清浄と釈する。各々一義によりて相顕すゆへ、吾祖は二義倶に御依用なされるなり。次に「まふすなり」とは、御草稿の本には「ナツケタリ」とあり。これは本偈の文には「号清浄光」と「号」の字なり。この「号」の字はつねに「なづくる」と訓ずる文字なり。夫ゆへ前後の和讃にはみな「なづけたり」とあり。爾るにこの「号」の字、古訓には「まふす」とよむことがあり、『日本紀』一初右に「号二国常立尊一」とある。「号」の字に「まふす」と云ふかなをつけてあり。爾れば「号」の字を「なづくる」と訓ずるは勿論なれども、又「まふす」と

も読ことがあると云事を顕して、ここでは「清浄光仏とまふすなり」と言をかへさせられたものとみへるなり。

51

「ひとたび光照かふるもの 業垢をのぞき解脱をう」とは、「光照」と云は、御左訓に「ヒカリニテラサルトナリ」とあり。爾れば光明の御てらしをかふむる事を、「光照かふる」と仰せられたり。「ひとたび」と仰せられたは、次の句の「業垢をのぞき」と云事を云はんがために、「ひとたび」と云かけさせられたもの。この光明にてらされて、衆生の悪業煩悩ののぞこるのは、いくたびも々々てらしてのぞこるではなひ。宿善開発の行者は、ひとたび光明にてらさるゝとき、たちまちに罪をのぞこる一念帰命の立處に、三世業障一時につみきえてのこころで「ひとたび光照かふるもの」との玉ふなり。「業垢」とは、「業」即ち「垢」の持業釈にみるは宜しからず。これは「業」と「垢」との相違釈なり。夫はなぜと云に御左訓に「アクコフホムナフナリ」とあり。御草稿の左訓も同じ事なり。これ「業」と云は悪業の事、「垢」と云は、煩悩の事なり。殺生・偸盗・邪淫・妄語等を「業」と云ひ、貪欲・瞋恚等の煩悩のことを「垢」と云と仰せられる御釈なり。煩悩を「垢」と名けることは『大乗義章』五本左初に「煩悩を又は垢と名く。煩悩はあかけがれのやうなもので、たま々々清浄心を起す事がありても、煩悩で其心をけがすによりてそこで煩悩を垢と名ける」との玉ふ釈があり、爾れば「業垢をのぞき」と云は、一念の立處に法の徳で、あらゆる業煩悩を一時に消滅なされるなり。

「解脱をう」とは、解脱のことをば上の「解脱の光輪」の下にて弁ずる如く、涅槃のさとりのことを解脱と申すなり。そこでこの「解脱をう」とあるのを現益に見る義があれども甚だ非なり。これはもと『大経』の「寿終之後皆蒙解脱」の文によらせられたのでこの経文には「寿チ終テ之後チ皆ナ蒙二解脱一」とあり。爾れば浄土へ往生して、

解脱涅槃のさとりをうることなり。夫ゆへに御草稿の御左訓には「ケタチトイフハ止イフ」とは、まぎれぬやうに御釈があり。爾れば今清浄光仏の現當二益をあげて「ひとたび光照かふるもの　業垢をのぞき解脱をう」と仰せられたり。

52

慈光はるかにかぶらしめ　ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ　大安慰を帰命せよ

七に歓喜光。この和讃には、歓喜光仏と名けたりといふことはなけれども、一首の全体が歓喜光のすがたを御述なされた和讃なり。先初句に「慈光」とあるは、仏の大慈悲より放つ処の光明なるがゆへに「慈光」と云。ときに不審あり。上の「智慧の光明」の下で弁ずる通り、光明は智慧の相と云こと、『大論』の処々に出てあり。又『浄土論』にも「光明智相」とあるにより、智慧を体として智慧から放つ光明ぢゃと云が、定りごとなり。今何故「慈光」と仰せられたと云に、一概すべからざることなり。『涅槃経』二十一「光明をば名て為智慧」とあり。其次下の文に「光明者名大慈大悲」とあり。これは、自利々他の二門で分けたので、仏の自利門を以て云ときは、仏の智慧が外へ顕はれたのが光明ぢゃによて、光明は智慧を体とす。若し又、仏の利他門をもて云ときは、仏の大慈大悲から光明を御放ちなさるによりて、そこで『涅槃経』に「光明者名大慈大悲」と仰せられたものなり。近くは『観経』の「真身観」の文には、弥陀の光明摂取を説くところに「以無縁慈摂諸衆生」と説てあり。これ光明で衆生を摂取なされると云ものは仏の大慈大悲なり。爾れば、利他門の方よりみれば、慈悲より放ち玉ふ光明ぢゃによりて、「慈光」と云なり。今此和讃へ「慈光」を御出しなされたは、鸞師の思召は、この歓喜光と次の智慧光

とをば、慈悲と智慧との二へ御当なされた。この歓喜光の事を、異訳の『平等覚経』一十四右云「見二無量清浄仏光明一莫下不二慈心歓喜作善一者上」文。これが歓喜光と名けるいはれを説く経文なり。ときに、其衆生をして歓喜心を生ぜしむるは何故ぞと云へば、仏の大慈悲の光明ぢゃによりて、衆生が歓喜するなり。喩へば、上天子より仁徳をもて下を哀れみ玉ふ故、下万民が皆ありがたひと云て悦服するなり。今も其如く、仏の衆生を哀れみ玉ふ大慈悲の光明なるがゆへに、光明の至る処みなありがたひとよろこび歓喜の心を生ずる。爾れば、この歓喜光は仏の慈悲門の光明であるによて、そこで最初に「慈光」と仰せられたものなり。

53

御草稿御左訓に「アハレムヒカリ」とありて其次に、「シハチ、ノジヒニタトフルナリ」。これは「慈悲」の二字をちゝとはゝとにわけてたとへるときは慈父悲母と申すなり。これは吾祖常に御喩へなされ、釈迦・弥陀を父母に御たとへのときも、光明と名号とを御喩へのときも慈父悲母と仰せられ、今この御左訓にこゝに父に喩ふとあるも慈の字のこゝろをのべさせられたるなり。別に意はなひ、こゝに「慈光」とあるものぢゃによて、其慈の字のこゝろをわけて云ときは父の慈にたとへると仰せられる御釈にて、歓喜光にかゝりあふ事ではなきなり。

「はるかにかぶらしめ」とは、この「はるか」と云文字は『讃弥陀偈』の文には「遐」の字にかいてあり（遐代をうるほすと云遐の字／が遣ふてあり）遐は遠なりと註してとをくおよぼすことなり。今歓喜光の光明ははなはだとおく、十方世界の衆生にかぶらしむると云事で「慈光はるかにかぶらしめ」との玉ふ。

「ひかりのいたるところには」とは、上の句には「はるかにかふむ[ママ]らしめ」とあり。こゝには「ひかりのいたるところ」とあり。「かふむ[ママ]る」と云は、仏の光明はるかに十方世界へ及ぶ事なり。又「ひかりのいたるところ」と

云は、其光明の至りとゝいた処なり。たとへば「南枝北枝之梅開落已二異也」と云如くで、春の陽気は一面にゆきわたるとも、其陽気のゆきとゝくには遅速があるによて、花のはやふひらくのもあり、をそく開くのもあるなり。今も其如く、弥陀の光明はつねに十方へゆきわたれども、宿善の機ありて他力信心の花の開くところが光明のいたりとゝいた処であるによて、そこを「ひかりのいたるところには」との玉ふ。

54

「法喜をうとぞのべたまふ」此句が正く歓喜光の相たをのべさせられる處で、これは鸞師『大経』の「身意柔軟歓喜踊躍」の経文をば歓喜光仏の下へ切り合せて仰せらるゝなり。前后の例で『讃弥陀偈』は『大経』の文を切合せて十二光を御釈なさる。今こゝも「身意柔軟歓喜踊躍」で衆生を歓喜せしむる所の、光明なるがゆへに歓喜光となづける、と御釈なされるのなり。爾るに今の御言つかひには、「歓喜」と云はずに「法喜」との玉ふは、是は『六十華厳経』二三十に如来法を説玉ふとききくものをして歓悦の心を生ぜしむると云處にこの法喜の言があり。爾れば「法喜」と云は、法を聞て歓喜することなり。そこで御左訓に「ミノリヲヨロコブナリ」とあり。こゝは法喜との玉はねばきこへぬ所で、上の句に「ひかりのいたるところには」とあるのは弥陀の歓喜光の衆生へ至り届かせられた處、其衆生へいたり届ひた處で喜びを生ずるなり。たゝよろこびがおこるではなひ。「聞其名号信心歓喜」と善知識から本願名号のいわれを聞ひらきて、信じよろこぶによてそこがみのりをよろこぶ處。よりて「法喜をうとぞ」との玉ふなり。次の和讃の「智慧光仏」は、弥陀の智慧門の光明、そこで衆生無明の黒闇をのぞかせ玉ふ。この歓喜光は弥陀の慈悲門の光明、そこで衆生の慈悲歓喜の心を生ぜしむると云ことで、「法喜をうとぞのべたまふ」と仰せられたものなり。ときに御草稿の御左訓に「クワンキ止ケサムレウナリ」とあり。羽州本・高田の本この通

りなり。鱗形の河州本には、「チラサムレウナリ」とあり。けすと云もちらすと云も、義は同じ事なり。ときに歓喜光仏を法喜と云との玉ふは云何と云に、歓喜光仏は仏名なり。法喜は行者の喜びのことなり。これは吾祖常に他力信心の喜びの事をば、広大難思の「慶心」とも「大慶喜心」ともの玉ふ。行者の凡夫心で、なかなか喜ばれるものではなひ。今不浄造悪の凡夫心からみぬ極楽が手に取るやうによろこばれると云は、全く他力回向の大慶喜心なり。凡夫でよろこぶにちがひはなけれども、この心がすなはち凡夫心ではなひ。全く他力の慶喜心ぢゃ、との玉ふ意なり。今御草稿の御左訓が、其こゝろにして「法喜」と云は、今家の本の御左訓の通りに、行者のよろこびの事ぢゃ。行者の方に法を聞てよろこぶ、其よろこびが全く歓喜光仏よりおこさしめ玉ふよろこびじゃと云事で、歓喜光仏を「法喜」と云と御釈なされたものなり。

55

さて、次の言に「コレハトム止レウナリ」。「れう」と云は「ため」と云ことで、三毒をけさん為めの歓喜光ぢゃと云ことなり。これはきこへぬ御釈で、吾祖は憬興の釈を御依用なされて、清浄・歓喜・智慧の三光を三毒へ配当して、この歓喜光は瞋恚の煩悩を対治する光明ぢゃ。瞋恚の煩悩の事を、『倶舎婆娑』では「戚行転」と申て、かほをしかめてうれへかなしむときでなければ起らぬなり。爾れば、よろこぶと瞋恚とは水と火の如くぢゃによて、瞋恚の煩悩を対治する所が歓喜光なり。よて「大経和讃」には、「清浄歓喜智慧光　その徳不可思議にして」と云処の御左訓には、憬興の釈の通りに三光を以て三毒をけしほろぼすとす。爾るに、今の御左訓には、歓喜光をもて三毒を滅すとは如何と云に、私も前方心得ましたは、これは吾祖、清浄・歓喜・智慧の三光をば、体一互融で御釈なされる。体一互融といふは、この三光を分るときには三毒に当れども、体は一なる事を顕して、歓喜光をもて三

毒をけしほろぼすとの玉ふたと心得ても、随分すむなり。よく考ふればそうではなひ。これは吾祖、鸞師の『讃弥陀偈』と、憬興の『述文讃』の釈と、義を取る事別なりと云ことを顕す。御釈下の「大経和讃」では、吾祖自ら『大経』のこころをのべさせられるによりて、そこで憬興の釈を丸出しになされるなり。今は『讃弥陀偈』により玉ふ和讃なるが故に、『讃弥陀偈』のこころでなけねばならぬ。よて、憬興の釈用ひ玉はぬなり。憬興の釈は、三光では次での如く当つる。鸞師の釈は、夫とは違ふと御覧なされる。夫は云何と云に、上の和讃でみるべし。「清浄光仏」をば、鸞師は色相に約して釈し玉ふ。又、「業垢を除き解脱をう」とあれば、ただ貪欲ばかりをけしほろぼすとはの玉はぬ。通じて悪業煩悩をのぞくと云のが、鸞師のこころ。夫なれば、この歓喜光仏が、ただ瞋恚の煩悩にかぎるはづはなひ。鸞師はすべて『大経』の文へ引合せて、十二光を御誘きなさる。すなはち、この歓喜光をば、「身意柔軟歓喜踊躍」の経文へあてて、「法喜をうとぞのべたまふ」と仰せられた。其「身意柔軟」の前への句に、「三垢消滅」とあり。この三垢と云は三毒の煩悩の事ぢゃ。爾れば、『大経』の文でみるときは、三毒を三光へわけるではなひ。歓喜の光力によりて、「身意柔軟歓喜踊躍」とよろこぶ所が、即ち「三垢消滅」の所、そこがはや信心歓喜の一念に三毒の煩悩一時に消滅したまふときぢゃ。よて、歓喜光をば、ただ瞋恚へあてるではなひ。「三垢消滅」と云が鸞師のこころぢゃと云ので、御左訓に「トムヨクシンイグチ止ナリ」との玉ふ。又「ヤミヲケサムレウ」とは、『大経』の「重誓の偈」の「消除三垢冥」の言をとり玉ふなるべし。

56

「大安慰を帰命せよ」、「安慰」と云は漢土の人は常につかふ言で「安」は安隠のこと、「慰」はなぐさめること。向ふの人がこはがりておちおそれおるのを安穏におちつかせてなぐさめることを「安慰」と云なり。そこで、仏教

で仏・菩薩の慈悲をもて衆生ををそれげのなひやうに落付せ玉ふ事で「安慰」と云。すなはち『勝鬘経』には「大悲安慰」と云ふ言があり。夫を『宝窟』中本廿に「菩薩以二大悲一覆二護衆生一以名二安慰一」文、又『占察経』右三十に地蔵菩薩言に「我嘗テ以二巧便一宣二顕実義一而安二慰シ之一令レ離二怯弱一是故二号シテ我一爲二善安慰者一」文、是は菩薩の衆生を安穏になし玉ふことをば「安慰」と云なり。今は仏を「安慰」と名くる。是は『六十華厳』四十左二六仏の異名を説く所に或は「称二安慰一」とあり、又「大」の字を付て「大安慰」と申すことは『大集月蔵経』四十五陀羅尼の利益を説く所に「於生死中作大安慰」とあり。これらは言の出どころなり。今は別して阿弥陀を「大安慰」と名くる。これは『大経』の讃仏の偈文には「一切恐懼為作大安」とあり。弥陀の因位法蔵菩薩の願に、我れ一切衆生の恐れ懼れておるものを大安穏にならしめんと御誓ひがあるゆへ、果上の弥陀如来を「大安慰」と名くる。そこで御草稿の御左訓に「ダイアン井ハミタノミナナリ乃至ヤスカラシム」と。この御釈は「大安慰」と云は弥陀一仏にかぎる名ぢゃと云意ろなり。云何と云に、一切衆生のなげきうれうる処の大事と云は、生死岸頭の一大事なり。后生を大事と思ふてみれば、まことに薄氷をふむが如く恐れなげかねばならぬはづ。其恐れなげきを忽に安穏ならしめ安慰にし玉ふ仏は外にはなひ。阿弥陀如来一仏、即ち今の歓喜光の利益なり。罪業具縛の凡夫が信心歓喜の一念に後生の大事を落付てありがたきやとよろこぶやうに、安慰ならしむるは阿弥陀如来一仏なりと云ことで「大安慰」と名くるなり。

57

無明の闇を破するゆへ　智慧光仏となづけたり
一切諸仏三乗衆　ともに嘆誉したまへり

八に智慧光。「無明の闇を破するゆへ」とは無明をやみにたとへて「無明の闇」との玉ふ。御左訓に「ヤミニテクラシ」とあり。まづ無明の名を釈するに、註解の中に無明とは「明を無すると云事で明かなる心のなひ所を無明と云」とあり。これらが性相をしらぬ故に、こんな間違ひの釈があり。『倶舎』「世間品」の無明を明す所に明を無する所を無明といは、なんにもない所が無明なり故に、無明は体のなひものになると破してあり。爾ればこの註解の釈は即ち『倶舎論』の所破になるなり。これは『大乗義章』五本二十左に「痴闇之心体無二慧明一故二曰二無明一」文此釈聞へたり。無明の体は愚痴の煩悩、其愚痴の煩悩の体の上に智慧の明りのなひところを「無明」と名くるなり。ときに愚痴の煩悩を「無明」と名くると云が大・小乗の通判なり。然れども小乗は小乗、大乗は大乗の明し方があり、大乗の中にも『唯識論』と『起信論』と夫々の明し方が別なり。『起信論』では真如の理に迷ふ無明が迷の根本なり。故にこれを「根本無明」と名く。其「根本無明」がもと、なりて、あらゆる業煩悩を起すによて、業煩悩の事を「枝末無明」と名く。天台では「見思・塵沙・無明」の三惑と分つて、界外の別惑を「無明」と云なり。今鸞師の『讃弥陀偈』を伺ふには、鸞師の『論註』を以て伺ふべし。『論註』下右二「無碍光如来ノ名号ハ能ク破ス二衆生一切無明一」と、これあらゆる業煩悩を悉く無明と名く故に、衆生一切の無明との玉ふ。吾祖の「無明長夜の闇」との玉ふも、又『御文』に「無明煩悩のをそろしきやまひ」との玉ふたも同じ事なり。「無明」と云が愚痴の煩悩に限たことではなひ。あらゆる業煩悩を総して「無明」と云。聖道門では煩悩に段をつけて『勝鬘経』でなれば五住地の煩悩、『唯識論』では「煩悩所知の二障」と云やうに段を付るのは修行して、漸々に煩悩を断じてゆくによて、そこで煩悩に段を付けたものなり。たとひ圓教と云へども、修行門の時は漸断なり。よて煩悩に色品をわかたねばならぬ。浄土門他力の教へは夫と異りて、他力の不思議であらゆる業煩悩一時に断じ玉ふ。そこで業煩悩をば一口に「衆生一切の無明」とも云ひ、無明業障のをそろしき病ひともの玉ふなり。ときに『論註』の次の文に「然有称

名止所願者」とありて口ちに名号をとなへても、本願を疑ふものには無明なをある、と云意なり。是は『大経』の智慧段に仏智の不思議を信ずるものを「明信仏智」と「明」の字がつき、仏智の不思議を疑ふものを「不了仏智」とおとしめ其「不了仏智」の者には信心の智慧明がなひゆえに無明なり。『大乗義章』には「痴闇之心体無二慧明一故曰二無明一」と釈してあり。今『論註』の文に「称名憶念而無明由在」とありて信心の智慧なきがなゆへに「無明」と云なり。この疑の無明が根となりて生死に流転する。そこで『選択集』には「生死の家には以レ疑為二所止一」との玉ふ。今「無明の闇を破するゆへ　智慧光仏となづけたり」とは智慧光仏へ対して「無明の闇」と云。爾れば仏の智慧明を生ずる時、生死の根本たる疑ひの無明が破れるによって其時法の徳であらゆる業煩悩一時に消滅し玉ふなり。又三世の業障一時につみきえる所夫を無明の闇を破するゆへ、智慧光仏となづけたなり。こゝが聖浄二門のわかれめで、法性の理に迷ふを「生死」と云。法性の理を證るを「涅槃」とす。そこで法性の理に体達した所で、直に迷ひの根本の無明をはなれ法性をさとると云が聖道門の意。浄土門では本願を疑ひ、仏智を疑ふ疑ひを迷ひの根本とす。其根本の疑ひの離れる所で、あらゆる業煩悩は消滅して其時生死の迷は盡るなり。爾れども法性の理はさとらぬ。法性の理は浄土へ往生してからでなければさとられぬなり。信の一念の所で色形なき法性の理に叶ふと云は、大きな違ひなり。聖道門は、迷の根本たる理に迷ふ無明を離れる所が、直に中道の理に体達する所。浄土門は本願を疑ふ疑が迷の「根本無明」なり。全体法門の建立が違ふ。そこで其疑をはなれる所で生死の迷ひは盡たれども、法性の理は浄土でなければ證れぬなり。よて「三有生死の雲晴て」と云は現益なり。「一如法界の真身顕れる」と云は當益なりと分かつが、吾祖一家の御定判なり。今は宿善開発の行者弥陀の智慧光のちからによて、疑の無明立所に晴れ、生死長夜の黒闇一時に破り玉ふが故に「智慧光仏」となづけるとの玉ふなり。

58

「一切諸仏三乗衆　ともに嘆誉したまえり」。「一切諸仏」とは、三世十方の諸仏なり。弥陀の光明を讃嘆し玉ふは、釈迦如来ばかりではなひ。三世の諸仏も十方の如来も、亦是の如く讃嘆し玉ふ。一仏一切仏で、過去の諸仏は已に説き、現在の諸仏は今説き、未来の諸仏は当に説く。大王路の如くかはらぬと云が、諸仏説法の儀式なり。夫故に、今「一切諸仏」と云。「三乗衆」とは、御草稿の御左訓にもある通りに、声聞・縁覚・菩薩、是を「三乗衆」と云。弥陀の光明を讃嘆し玉ふは、諸仏ばかりではなひ。十方世界の声聞・縁覚・菩薩の三乗衆、みな共に同く弥陀の光明を称揚讃嘆し玉ふと云事を、「ともに嘆誉したまへり」と云なり。「嘆誉」と云は、「嘆」は讃嘆、「誉」は褒誉なり。ともにほめる事、よて御左訓に「ホメホムルナリ」と。この後の二句の本偈の拠は、『大経』の文に「不但我今称其光明一切諸仏声聞縁覚諸菩薩衆咸共歎誉亦復如是」と。弥陀の光明を讃嘆するは、但だ我が讃嘆するばかりではなひ、一切諸仏三乗衆ことごとくともに嘆誉したまふとの、釈迦如来の金言なり。此経文の意を述べさせられて、本偈に「一切諸仏三乗衆咸共嘆誉」との玉ふ。ときに、この経文をば「智慧光仏」の下へ切り入させられたは如何と云に、本偈の意ろは『大経』の光明嘆徳の文をば、「無対光」から下の光明へ宜しきに随て当て玉ふ。この経文が、文の次第でみるに、「智慧光仏」へ当るなり。そこで、ここへ切入させられたとみへるなり。更に別に意ありとはみへぬ。文の次第で切り入させられるとみへるなり。又、吾祖の思召で伺へば、この経文をここへ切り入させられたには、甚だわけのあることなり。其思召は、御左訓に顕れてあるなり。御左訓に「一サイショフチノチエヲアツメ止ナリタマフナリ」と、羽州本并に高田の本、この通りなり。この御左訓は、且く密教のこころでさばくときは、真言密教には、五方五仏を立てて、中央には大日如来・東方阿閦如来・南方宝生仏・西方に阿弥陀仏・北方に天鼓音仏と、五仏を立てるなり。これも、胎蔵界と金剛界と、名の変る事があり、今且く一名を挙げた

のなり。但だ阿弥陀如来は、いつも名のかはると云事はなきなり。ときに、この四方四仏を、胎蔵界の時は、発心・修行・菩提・涅槃の、この四門へ当てて、西方の阿弥陀如来は菩提に当るなり。弥陀は成菩提を主る仏なり。又、金剛界の時は、この四方四仏を、菩提と福徳と智慧と大精進と、この四つに当るなり。此時は、阿弥陀は智慧に当りて、一切諸仏の智慧を主どり玉ふ。爾れば、福徳・智慧の中では、智慧門の仏。又、一切諸仏の修行成就し、菩提の果を成し玉ふ。諸仏の成菩提を主るが、阿弥陀仏なり。密教のこころでは、一切諸仏を全ふしたのが、大日如来の一仏とたてて、其大日一身を開た所が、五方五仏なり。よて弥陀を智慧門の仏とするも、弥陀と云仏けが別にありと云事ではなひ。一切諸仏を全ふした所で、諸仏の智慧門を弥陀と名けるなり。又、菩提にあてるのも其こころで、一切諸仏の成菩提の果を弥陀と名けるのなり。時に、今の御左訓を、この密教へあてて申すときは、弥陀は智慧門の仏で、一切諸仏の智慧を集め玉へる仏け故に、「智慧光仏」と申すなり。又、西方の弥陀は、諸仏の成菩提の果なり。一切の諸仏菩提の智果を成し玉ふときは、この阿弥陀の智慧にて成仏し玉ふ故に、「井チサイ止タマフナリ」と。ここらは台密の言遣ひでの玉ふたものとみへて、密教の所談にあてればよく合なり。爾らば、この御左訓は、密教のこころでの玉ふかと云へば、左やうではなひ。密教の所立は、無始無終本来常住の大日一身の上で建立した弥陀如来なり。密教に於ては、たとひ弥陀を報身と名けやうが、応身と判じやうが、みな本来本有の法身の上で云ことなり。よて『大経』所説の別願酬報の弥陀を談ずるに、吾祖、密教をもての玉ひたことはなひ。

59

西山では密教のこゝろをもて浄土の法門を誘くなり。夫を今家のこゝろへまぎらしてきて密教でも学ぶと人の知ぬことぢゃによて、珍しそふに密教のこゝろをまぜて大ひに法門の建立を乱すなり。吾祖「真仏土巻」に数部の経

論釈が引てあれども、密教を御引用は『不空羂索神変真言経』の阿弥陀清浄報土の文ばかりなり。善導一家の唯報非化と判釈なさるゝ弥陀の浄土はこれ報土ぢゃと云證據になる文故に、この『不空羂索真言経』の文を御引用なり。其外密部の経を御引なされた事はなひ。台密を学びたまふ吾祖密教の中にしば々々弥陀のことが出てあれども密教の所談を御引用はなし。爾れば今の御左訓も密教のこゝろでの玉ひたのではなひ。爾らば密教の所談と同ずるは如何と云に、これは密教の所談を随宜転用して其述る所の義は正依の『大経』によての玉ふ。爾れば直に『大経』での玉ふべし。何故に密教の所談を転用し玉ふぞと云へば、あらゆる顕密の諸経はわが浄土の『大経』の所流方便の経ゆへに、吾祖とき々々一代諸経をば浄土経のこゝろで御取扱なされることあり。こゝらも密教までを浄土経から流れ出た支末法輪となさるゝ御料簡と相みへるなり。西山の如くに密教のこゝろをもて浄土の法門を誘いては、かへって浄土門は密教の下へつかねばならぬ。今家の吾祖は浄土の法門は浄土経の意で立ぬいて、真言や天台に云事も転用してこと々々く浄土経のこゝろにして御仕舞なされるなり。爾らば御左訓を正依の『大経』のこゝろで申すときは如何と云に、これは一朝一夕には弁じがたし。略して云へば、上の「智慧の光明」の下で弁ずる如く『大経』の智慧段で弥陀の五智は一切諸仏の智慧を全ふした弥陀の智慧とみへるなり。故に経文にも「諸仏無上智慧」と説てあるなり。全体『大経』一部の説相が諸仏を全ふしたる阿弥陀如来で、一切諸仏の本仏とする説き方。その證據は異訳の『大阿弥陀経』には、弥陀の事をば「諸仏阿弥陀」とあり。「大経和讃」の左訓に「ミタヲシヨフチトマフスクワトニントウノコヽロナリ」とあるが『大阿弥陀経』なり。弥陀を諸仏と名けたは、弥陀を離れて諸仏はなひ一切諸仏を全ふしたる阿弥陀如来ぢゃと云ことなり。爾れば『大経』所説の弥陀の五智は、一切諸仏の智慧を集め玉ひたる智慧光仏なり。これが即ち弥陀を諸仏の本仏とする意ぢゃと云ことは光明段に顕れてあり、諸仏中之王なり、光明中の極尊なりと説せられた光明は何ぞ、弥陀の智慧なり。そこで吾祖は此如来は光明なり、光明は智慧

なり、光明が直に智慧ぢゃ故に『二門偈』には「斯ノ光明ハ即チ諸仏ノ智ナリ」との玉ふ。かくの如く光明を以て弥陀の智慧を仰せられる思召ぢゃによって、今も智慧光仏の御左訓にこの義を述させられて「一切止マフス」との玉ふ。爾れば弥陀は諸仏の智慧門の仏なるゆへ諸仏みな弥陀の智慧によて成仏し玉ふ。夫を『般舟三昧経』へ引合せて云ときには「三世諸仏止成等正覚」文念仏三昧と云が智慧の念仏で智慧なり。「三世諸仏」はみな阿弥陀如来の智慧の念仏で成等正覚なされる。そこで今、御左訓の次の一段に「井チサイ止タマフナリ」とこのいはれあるによて、一切諸仏並に三乗衆より挙て弥陀の光明を称揚讃嘆なされると云ことで、后の句に「ともに嘆誉したまへり」との玉ふ思召とみへるなり。

〈キーワード〉

浄土　光明　讃阿弥陀仏偈